
礎の心臓

海門ランドルフ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

礎の心臓

【Nコード】

N1052H

【作者名】

海門ランドルフ

【あらすじ】

広大な宇宙には数々の世界が存在する。商業が盛んな世界、海で出来た世界、砂漠の世界など様々。そんな世界が徐々にほころび始めている。人類が絶滅した世界、他の国から離された世界、全てが消滅した世界。……その元凶はある組織にあった。

プロローグ（前書き）

題名の読み方は「いしずえのハート」。

「いしずえのしんぞう」ではありませんww

序盤は不思議なことがたくさんあって、謎が深まっていますが、
徐々に解決していく物語です！

ブローグ

この宇宙には数々の世界が点在している。

その数は数え切れるものではない。

大きな世界から小さな世界。

それぞれの世界には別々の特色がある。

たとえば、ロマンドという世界は商業が栄えている。

数々の食料を栽培し、つくり、宇宙列車に乗せて世界各地に運んでいる。

宇宙列車とは、世界と世界をつなぐ列車。たった1つだけの列車は1年中休むことなく動き続けている。

そんな宇宙で近頃問題がおき始めていた。

宇宙に点在している無数の世界が徐々に崩壊し始めている。

ある世界は生物が全滅した。また、ある世界は宇宙列車とのつながりを断ち切られてしまい、孤立。

理由はまったくのなぞに包まれているが、その崩壊は確実に進んでいる。

崩壊した世界はまだ全体の10パーセントにも満たないが、この

ままでは宇宙のバランスが崩れてしまう。

商業の町のロマン드가崩壊すれば、食料に関して全世界的な不況に陥ることは確実だ。

この宇宙全土のピンチにある国が立ち上がった。

この宇宙最大の世界・ハイラント。それを治める王国ゴールドシルン。

「この闇に包まれた事件。われわれがなんとかするしかないだろう」
まさに王様。といえる格好の玉座に座している男が神妙な顔つきでそう言った。

「確かにこの国は全宇宙で一番の戦力を備えております。ですが、全世界を救うには人手が少なすぎます」

王の前に右ひざをついた男がそう返した。

ゴールドシルンは全世界で一番の戦力を持っている。平和なこの宇宙では過去に一度大きな戦争があっただけで、最近では何の事件もなかった。

ほかにも強い兵力を持った世界もあるが、ゴールドシルンは別格だ。

「では集める。全世界を周り、兵力になるものを集めよ」

「しかし、武力だけでどうにかできる問題ではありません！」

右ひざをついた男はそれまで下げていた顔をあげて、玉座に座した男にそう言った。

「この怪奇現象。おそらく何者かによる仕業」

「人がやっているというのですか!？」

「人かは知らんが、意思が働いているのは間違いない」

2人の間に静かな空気が流れている。

「分かりました。今すぐに衛兵たちを世界に飛ばします」

「任せた」

すると男は右ひざを上げて立ち上がり、大きな広間から出て行った。

「ここまで戦争がおきなかったのは奇跡。ついにその系が切れるか」
玉座に座した男はさらに顔つきが神妙になった。

プロローグ（後書き）

読んでくれてありがとうございます！

このプロローグの後半に出てきた2人の男は、主人公ではありません。
ん。

主人公は次回から登場です！

- 31話：記憶の無い少年

俺は誰なんだ？

俺は何のためにここにいるんだ？

その答えは分からない。

俺の名前は、レグオズ。

それが本当の名前かどうかは知らない。

俺の上司とも言えるやつが俺をその名で呼んだ。それから俺はレグオズとしてやってきた。

今、白い部屋にいる。机・窓、その窓にかかるカーテン・クローゼット、すべてが白い。

この部屋は俺の部屋だ。

俺には過去の記憶がない。

あるのは最近1ヶ月くらいの記憶だけだ。

そう、組織に入ることになったあの日の夜からの記憶だけしか……

今から1ヶ月ほど前、俺はある男に拾われた。

「ここで、何をしている？」

ゆっくりとした口調の男が暗い夜道を歩く俺に話し掛けた。

「……」

俺は何も言わなかった。いや、言えなかった。

記憶がないから、自分がなぜここににいるのかというのも分からない。

「名はなんと言う？」

「……」

その問いかけに対しても答えなかった。

その時は考えたこともなかった。

「名前……」

俺はやっぱり分からなかった。

もしかしたら昔は知っていたのかもしれないが、過去の記憶のない俺には分からなかった。

「記憶……がないのか。お前、これからどこへ行く？」

男は俺の問いかけに答えず、また俺に問い掛けた。

「……」

また答えられなかった。俺はただずっと道を歩いていただけ。目的もなく、ただひたすら道を歩いていた。

「最後の質問だ。君はいつからの出来事を覚えている？」

「この……夜道を……歩き始めたころから」

俺はついさっきのことからしか記憶になかった。

（この夜になる前に何かがあったのか。服はきちんとしているな。つまり、少し前までは普通の生活をしていた……ということか）

男が俺の体を見回している。

何かついているのかと思った俺は、自分の体を見た。

「あ……」

その時初めて、俺がまともな服装をしていることに気がついた。それまで全く意識はしていなかった。

俺は、赤と黒の服に黒いジーンズをはいていた。赤と黒の服にはところどころチャックがついている。俺はそのチャックを開けて見たが、ポケットらしきものはなかった。

（チャック……ついてるだけか。何のためだ？）

「君自身が長生きしたいのなら私について来くるがいい。一緒にくれば死ぬことはない」

男は俺に右手を差し伸べた。

どうしてかは分からなかった。

だが今の俺には、それを考える気力は無かった。

「……」

俺は一度うなずき、男の手を握った。

すると男は不敵な笑みを浮かべ、声をあげずに笑った。

男があいている左腕を空間に突き出し、手を広げると、空間に黒い渦が出現した。

「これは、闇の渦。選ばれしものだけが使える便利な移動術だ」

今は夜で暗いのとその黒い渦は俺にはハッキリと見えた。

俺はそれが不思議でたまらなかったが、やはり気力のない俺はそんなことどうでもよくなっていた。

すると男は握っている俺の手を引いてその渦の中へと入っていった。

気がつくとその場所はもう別の場所だった。

広い部屋には黒くて長い机が1つあり、それには10個程度の黒いイスが並んでいる。

全体像としては、結構暗い夜みたいな感じだ。

壁には大きな窓がついていてそこから、空を眺めることができる。

（あれ……今って夜だよな）

その窓から見える景色は、夜空ではなく夕焼けのような空だった。

ほかには特に目立つものはない。あるとすれば一本の長い階段だ。

「ここが私の世界、ノールドだ」

俺の隣にいた男が口を開いた。

俺は今をはじめてその男の姿をハッキリと見た。さっきは黒い道だったからよく見えなかったけど。

「世界。外は……どうなってる……」

いるんだ？と言おうとしたら突然目の前がグルグルと回り始めた。
「うっ」

気分が悪くなってきた俺は、頭を抑えてその場にしゃがみこんだ。

「ど……た」

男は何かを言っているがまったく聞こえなかった。

俺を襲っているめまいは収まることを知らない。さらに動きを強めて俺を襲う。

そして……

俺はエンジンが切れた車のように意識を失い、その場へ倒れた。
目の前が真っ暗になった。

どうやら車っていう基本生活に使う存在とかは覚えているようだ。

「う……ん」

俺は静かに目を開け、ぼやける目をこすった。

視界が良好になったとたん、俺の目にある景色が飛び込んできた。

「！」

それを見て勢いよく起き上がった。

机・窓、その窓にかかるカーテン・クローゼット、すべてが白い部屋に俺はいた。俺が寝ていたベッドも白い。

「どこだ……ここ」

周りを見渡したが、ほかには誰もいない。

「あつ……そういうえば俺、たおれたんだよな」

男に拾われた夜の出来事を頭に思い浮かべた。

（あれ？ 助けてくれたあの男つて、どんな顔だったっけ）

意識を失ったせいかわか、最近の記憶もあいまいになっている。

ベッドから起き上がり、降りた俺は部屋を見て回った。

「？」

何の変哲もない部屋をゆっくりと回っていると、ベッドの横にあった小さなテーブルに、ひとつの紙切れが置いてあるのに気がついた。

それを手にとった俺は目を向けた。

「何か、書いてあるな」

その紙には、一行の文章が黒い文字で書かれていた。

目が覚め次第、2階の大広間に来い。

「大広間？」

誰がおいたのかは分からないが、今は考えている暇はない。とにかくまずはそこに向かうのがいいと思った俺は、部屋のドアをあけた。

「！」

ドアの外は黒かった。さっきの部屋とは違い、全体が夜のようだ。円形状になった廊下には10程度の部屋があり、上へ向かう階段と、下へ下りる階段がそれぞれ螺旋状についている。

上を見上げると、何段にも部屋が積み重なっている。

（ここは1階じゃないみたいだな）

でも2階でもないみたいだ。

さっきの手紙が本当なら、この階に大広間へとつながるドアがあるはずだが、それらしきものは見当たらない。もしかするとこの10程度の部屋のどれかが大広間につながってるかもしれないが、ド

アの間隔が狭すぎるからそれはない。と俺は確信した。

（そうとすれば、下に下りるのが正解だな）

なぜか不思議な感じがした。

知らないはずの世界に俺は戸惑うことなく、自分の意思で進んでいる。昔のことは思い出せないが、特に惑うことはなかった。

螺旋状になっている下へと向かう階段を下りた俺は、周りを見渡した。

「でかい……」

俺の目の前に巨大なドアが飛び込んできた。

そのドアの上部には、パネルが張っており、そのパネルには「大広間」と書かれていた。

「ここだな」

このでかいドアの反対側には1階に続く螺旋階段が設置されている。

1回つばを飲んで、ドアノブに手をかけた。

「失礼します」

ドアをあけたその先には見覚えのある光景があった。

さつきとは違う、夕焼けのような感じで、黒くて長い机が1つあり、それには10個程度の黒いイスが並んでいる。

（ここって、俺が倒れた場所だ）

その数々のイスには、同じ格好をした者たちが座っている。

全員が白い服を着て、手首に黒いブレスレットがつけられている。でも全員が同じ服というわけじゃなくて、それぞれ違うところもある。

「よく眠れたか？」

聞き覚えのある声が俺にそう言った。俺を救いの手を差し伸べてくれたあの男の声だ。

「あ……うん」

俺はそう言っで、うなづいた。

男は長い机の一番奥に座っている。

俺ははじめてここにきた時のことをようやくハッキリと思い出した。

（そうだ……俺はあの男にここへつれてこられたんだ）

長い銀髪に冷たく光る青い目、その姿からだけでも相当な力強さが伝わってくる。

「紹介しよう。この者たちが、私の忠実なる部下であり、仲間だ」
イスに座っている10人の者たちが俺をじっと見つめている。中にはまったく関心を寄せないで、目を瞑っているやつもいる。

「え……あ……」

何を言っでいいのか分からなかった俺は、口をモゴモゴさせた。

そんな挙動不審的になっでいる俺に、銀髪の男が話を切り出した。
「君をわれらの新たな仲間にしよう」

「え？」

俺はついそう言っでしまった。おそらくこんなことをいわれたら、誰でもそんな反応をしまっでだろうが、それ以外には何の反応もできなかつた。言葉の意味もよく分からず、俺をただ首をかしげた。

「もっ一度言おう。君を、われら“テネブラ鏡”の第11の組織員として迎える」

男は両手を横に広げ、俺を迎え入れるかのようにそう言った。

俺は、男の発した単語の意味が何一つ分からなかつた。ただ、分かつたことが一つだけある。それは……俺が、この目の前にいるやつらの仲間になるということだ。

「いいな？ レグオズ」

男は俺をそう呼んだ。名前で呼ばれた記憶なんてないから不思議で不思議でたまらなかつた。

しかもその「レグオズ」が名前なのかということも確かじゃなかつた。

「レグオズってなんだ？」

案の定、俺は男にそう問い掛けた。
すると男は……

「君の名だ」

たったその5文字の言葉で、意味が分かった。

あの夜、答えれなかった男からの「名前は？」という質問。

もし、これからそう聞かれることがあった場合、俺は迷わず「レグオズ」と答えるだろう。

俺に名前がついた。

過去のことをまったく覚えていない俺にとって初めての知識となった。

それから少し、静寂の時間が流れた。

すると再び話が始まった。

「私の名は、グノウ。^{テネクラ}“鏡”のリーダーだ」

銀髪の男は、そう言って席から立ち上がり、ドアに向かって歩き始めた。

「……」

グノウは俺に見向きもせず、俺の横を通り過ぎていった。その時、俺はただならぬ、まがまがしいオーラをグノウから感じた。

俺は自然とグノウの目を見つめていた。なぜかその目をそらすことができなかった。

そして、ほかの組織員もグノウに続いて大広間から出て行った。

俺の横をグノウと同じように通り過ぎていったが、グノウほどの威圧感を感じ取れなかった。

すると最後に席を立ち上がった、赤い目に長い青髪を逆立てた男が、俺の横で立ち止まった。

「これからよろしくな！ お前は……記憶がないんだって？ まあ、そのうち思い出すさ」

「え……あ、ああ」

まさか誰かが話し掛けてくるとは思わなかった。俺は、どう対応して言いのか分からなかった。青髪の男は、笑顔で俺に話し掛けてきた。

そんな体験は記憶の中ではもちろん初めての体験だ。

「俺の名前は、ベゴン。第7の組織員だ。分からないことがあったら気軽に話せよ！」

ベゴンと名乗った男は俺の肩にポンと一回手を乗せて、大広間から出て行った。

その時、俺は心の奥で何かが盛り上がった感じがした。俺はこれがどんな感情がよく分からなかったけど、不思議な感じだ。でも多分、うれしいって感情だ。

記憶はないけど、感情についてはちゃんと理解できている。それは俺にとってよかった。もし感情まで無くしていたら俺はただの動く人形でしかない。

誰もいなくなった大広間に1人たたずんでいた俺も、部屋から出て階段を上り、さっきの部屋へと戻った。

——これが俺の“鏡”^{デネフラ}の一員としての生活の第一日目。出発点だ。

- 31話：記憶の無い少年（後書き）

面白くないかもですね。

初めて一人称にチャレンジしたんですが、思ったより難しいですね！。

（ ）を使って気持ちを表現しつつ、地の文でも主人公の気持ちを表現する。

というのにチャレンジしています。

まだ暫くは出てきませんが、バトルもありますのでご心配なく。

もしよければ、短くてもいいので感想を書いてください！
それが励みになるので

- 30話：するべきこと

レグオズという名前のついた“鏡”^{テネブラ}の一員としての第二日目。

俺は、真つ白な自分の部屋で朝日を眺めていた。

「まぶしいな……」

時刻は朝の8時程度。起きたばかりの俺には今日の朝日は少しまぶしすぎた。目に、太陽の光がたくさん入ってくる。

それに屈した俺はカーテンを勢いよく閉め、部屋を見渡した。

「これが俺の部屋……か。ちゃんとクローゼットまであるんだな」

俺は、もっと近くで見るために白いクローゼットに近づいた。

するとその時、クローゼットの戸に一枚の紙が張ってあるのに気がついた。

「……なんだ、これ？」

クローゼットの中にある“仲間の証”を着て、大広間に来い。

俺は、クローゼットを開いた。

するとそこには昨日、組織員たちが着ていたものと同じ白い服だけが入っていた。

「これをきるのか」

俺は今までずっときていたせいで少し汚れている服を脱いで、“仲間の証”に着替えた。

なかなか着心地はよく、体も動かしやすい。それに、なぜか心やすがすがしい気持ちになってくる。

「えっと……大広間。昨日の場所か」

もう一度、クローゼットに張ってある紙を確認した俺は、部屋から出て、大広間へと向かった。

大広間についた俺は、ゆつくりと大きなドアを開いた。

「……これで全員そろったな」

昨日と同じ席に座っている、リーダーのグノウがそう言った。部屋に入ったのはいいが、どうしたらいいのか全く分からなかった。

「座れ」

グノウが俺を見つめてそう言った。

俺は慌てて長い机を見渡すと、ひとつだけ誰も座っていないイスがあるのに気づいた。

すぐさまそこへ移動した俺は、イスを音を立てて引いて座った。

「よっ！」

隣に座っていたのは、昨日話し掛けてきてくれたベゴンだ。

ベゴンは右手を小さく俺に向けてあげている。それに対して俺は軽く会釈をした。

「それでは……今日の任務を言い渡す」

「任務？」

グノウの口から発せられた言葉に疑問を感じた俺は、思わず口に出してしまった。

「……レグオズはチエイグティと任務だ。任務についてなどは全てチエイグティから聞け」

俺は組織員の名前なんか誰も知らない。知ってるのはグノウとベゴンだけだ。その言葉に誰かが反応すると思ったが、ほかの組織員は誰も眉一つ動かさなかった。

「残りの組織員は昨日の続きをやってくれ。……以上だ」

グノウは席から立ち上がると、左手を空間に突き出し、闇の渦を出現させた。

「！ あの時の……」

俺は初めてグノウにあったあの時の、あの出来事をまた思い出した。

（最近の記憶ってのは忘れないものなんだな……）

そう俺は思った。

グノウは闇の渦に消えていき、ほかの組織員もそれぞれ部屋から出て行った。

まだそのチエイグティが誰か分からなかった俺は、思い切って誰かに聞くことにした。

（よし、ベゴンがいいかな）

「あの……チエイグティって……」

俺はまだイスに座ったままのベゴンにそう話し掛けた。

するとその時、話し終わったところとちょうど同じタイミングくらいで、ほかの男が話し掛けてきた。

「いくぞ、レグオズ。この城のトレーニングルームに移動する」

冷たい水色の右目に一本の傷負った、黒髪の男が話し掛けてきた。男の黒い髪の毛は、前髪が長い二本に別れ、後ろが首元付近まである。

「おつ、いじめんなよチエイグティ」

ベゴンが席から立ち上がり、チエイグティと呼ばれた男の前に立った。

からかっているのだろうか。

「お前は早く自分の任務へ急げ。確か、ゴールドシルンの調査だったな」

「めんどくせーけど、やるっきゃねーな」

俺には全くついていけない会話が終わると、ベゴンは空間に腕を突き出し、闇の渦を出現させるとその中へ消えていった。

「……。お前が、チエイグティか？」

俺は、そうだと確信しつつも、一応確認した。

「そうだ。早く行くぞ、着いて来い」

やっぱりそうだった。安心した俺は、心の中でひとつ息を吐いた。チエイグティは部屋を出て行き、階段を上っていった。それを見失わないように、俺は後をつけていった。

俺たちは何度か階段を上がると、そこにはもう上へ続く階段はなかった。

多分ここが最上階だ。

見る限りではこのフロアには5つのドアがある。このフロアは巨大で、ドアとドアとの感覚はだいぶ広い。

「どれがトレーニングルームなんだ？」

俺はそう質問した。

「……左から、ミーティングルーム・トレーニングルーム・実験室・エレベータールームだ」

チエイグティはそれぞれを指差しながらそう言った。

「？ 一番右の部屋は……」

聞き漏らしたのか。そんなわけない。俺は耳だけはいいいみただから。

「極秘だ。下っ端のお前に教えるのは禁じられている」

「……」

俺は納得がいかなかった。仲間なら教えてくれてもいいだろう……

「いづれ教えてもらえる。……さあ、トレーニングルームに入るぞ」

チエイグティは俺の前に立ちそう言くと、左から二番目の部屋に入ってしまった。

やっぱり納得のいかない俺も、その部屋に入った。

入ったその部屋は予想を覆すものだった。

「！」

部屋全体が黒い霧で覆われて、前などまったく見えない。

「この霧は、パツフィムと呼ばれている。今回のトレーニングには必要ないな。……はっ！」

チエイグティは突然、右手を横に振るった。

するとその手から、風が吹き出し霧をすべて吹き飛ばした。

「……」

俺は言葉が出なかった。見るものを凌駕するその風の威力。俺に

したら初めての出来事だった。

「レグオズ。今日からお前に組織員として最低限必要なことを教えていく。明日はまた別のやつが担当するがな」

チエイグティはそう言うと、俺から離れていった。

そして俺とある程度の間合いを取ると、俺のほうに体を向けた。

「組織の目的達成のために必要なこと……それは、世界の礎だ」

「？」

そういえば俺は、“鏡”^{デスフラ}の目的なんてまったく聞かされていない。

「礎。この宇宙に広がる無数の全ての世界に存在する核だ。それを失った世界は、徐々に消滅していく。そこに存在する人も同時にだ。俺たちはその核、つまり礎を破壊することだ」

「そんなこととしてどうするんだ？」

「極秘だ」

まただ。

俺には、何も教えてくれないみたいだ。

信頼されていないのか？

「礎はその世界のもっとも大事な部分におかれている。見た目は光るでかい玉だ。今、現時点で約40の世界の礎を破壊してきた。その仕事をお前にもやってもらう」

そんなことをしてどうするんだ？ って聞いても答ええてくれなかったチエイグティは絶対にほかの質問にも受け答えてくれないはず。

俺は、ただ黙ってその話を聞いていた。

「組織には、知っていると思うが、それぞれ1から11までのナンバーがついている。1から順に古いメンバーになっている。……俺は第9の組織員だ」

「俺は確か……11」

「そうだ」

一番新入りの俺はもちろん11番目だ。

でも意外だったのは、チエイグティはもっと上の番号かと思ったけど、俺とそこまで変わらなかったことだ。

「鏡」で一番強いのは誰なんだ？」

俺は、特に考えたつもりはなかったが、この疑問が一瞬で頭に出てきた。

「もちろん、グノウ様だ」

（やっぱり……）

俺は、本当は自分でもそうだと分かっていたが、なぜか聞いてしまった。

自分が分からない。

記憶を飛ばしてるから、そういうところにも支障があるのか。

「今日はこれまでだ……自分の部屋にもどれ」

そう言ったチェイグティは右手で闇の渦を出現させて中へと入っていった。

「部屋戻るか……」

闇の渦の使い方知らない俺は、ドアをあけて、長い階段をゆっくりと下りて自分の部屋へとまた歩いていった。

「やはり、イーターを使う能力があるようです」

明かりがうつすらとしか付いていない部屋で、チェイグティがイスに座るグノウと話していた。

「そうか……反応指数は？」

「軽く10000オーバーです」

「武器の教育は2日後、ティーゴストにやらせろ」

「はい」

チェイグティは頭をグノウに一回下げると、闇の渦を使わずその部屋から出て行った。

「レグオズ……お前はいつまで寝ているのだ」

グノウは悲しそうな表情でそう言った。

その真意はまったくの不明だが、その顔からは何かを思いつめる

ような、そんな感じさえする。

「ゼロ……私はお前を必ず……」

グノウはさらに顔が悲しくなった。目が下がり、顔を下にうつむけている。

グノウの口から発せられた「ゼロ」という言葉の意味も不明だが、おそらくは人の名前だろう。

下をうつむいたままのグノウはそのまましばらく動かなかった。

- 29 話：守護獣（ガーディアン）

テネブラ
“鏡”としての第三日目。

俺はいつもどおり、ベッドから起き上がって目をこすった。

周りを見渡すと、ドア付近の壁に何か紙が張ってある。

また、グノウからの指令なのか？

と推測した俺は、ドアに近寄った。

するとその紙には、

準備ができ次第トレーニングルームに向かえ

と書いてあった。

今日は、大広間には集まらないようだ。

特に準備をすることがない俺は、すぐさまトレーニングルームに向かった。

トレーニングルームのドア前に着くと、そこに一人男が立っていた。

「よーやく来たかぁ。早速トレーニングをはじめろぞ」

無造作な金髪で前髪は後ろに流し、一塊の毛だけが前に長くたれている。目は標的を射抜くようなすごい金色の瞳。

「つとまあ、トレーニングはしねえんだけどな！」

「……」

俺は言葉が出なかった。その風貌からは想像できないような軽いキアラに俺は、なんて反応したらいいのかわからなかった。

「ほら、入れ」

その金髪の男は、トレーニングルームのドアを開けて中へと入った。俺も男に続いて中に入った。

「さて、今日は俺たちの敵についての説明だ」

「敵？ 人間じゃないのか？」

俺が昨日ここにきたときにあった、パツフィルムという霧は今日はすでになかった。

「確かに人間も標的になる。だが、人間以外にも俺たちの目的を邪魔するやつらがいる」

「……」

変に緊張した俺は、一回つばを飲み込んだ。

「そいつらの名は、守護獣^{ガーディアン}。世界のいたるところに存在している、人の姿をした獣だ」

「？」

「理解が鈍いな……坊や」

「坊やって言うな！」

なぜか、そう呼ばれることにムカついた。せつかくレグオズという名前がついたのに、これじゃ何で名前がついたのか分からない。

「ふっ、あだ名だよ。……で、その守護獣^{ガーディアン}は人を食らって生きている」

「……！ 人を食べるってことか？」

「そーだ」

どういうことか俺には分からなかった。

俺には記憶がないとはいえ、食事とかのことは知ってる。いくら獣でも人の形をしているならほかの魚とか肉とかを食べるもんじゃないのか。

「よく分かんないな」

そう言うと、男はニヤリと笑った。俺はそれに少しの恐怖を覚えた。

「人の形をしているつつつても、もとの姿は獣なんだ。獣の理性があるんだろ」

「……」

俺はますます意味が分からなかった。

人であり獣？ 意味がさっぱり分からない。

「ガーディアン守護獣には3つのクラスが存在する。ガーディアン上級守護獣、ガーディアン中級守護獣、ガーディアン下級守護獣だ。下級は何千体以上も存在して、力も弱い。中級は体も少し大きくて凶暴性が増してる。数は数百体くらいだな。そして厄介なのが上級のやつらで、数は全宇宙に9体しかない。凶暴さや獐犷性はトップクラスで、俺たちと同等かそれ以上の力を持つてる。こいつらは無差別に人を攻撃してくる。目的があるのはいのか……。でも、誰かそれを統率しているやつがいるの確からしい」

話が長くてよく分からなかったが、上級はかなう相手ではなさそうだということが分かった。そしてそれが俺がこれから戦っていく敵になるということを……

「まあ、上級なんてやつらはめったに現れないからな」

「そうか……。そういえば、お前はなんて名前なんだ？」

「言ってなかったか？ 俺は、第4の組織員ロウクゴットだ」

（ロウクゴットか……）

俺はしっかりと新しい記憶の1ページとして頭に刻み込んだ。

「ちょっと早いけど、今日の修行は終わりだ。しっかり休めつつても、ぜんぜん疲れてねえか……」

「……」

「まあ、ちゃんと俺の言ったコトを復習しとけよ」

ロウクゴットは頭を書きながらそう話すと、闇の渦を出現させて、その中へと消えていった。

復習しとけといわれなくても、俺の頭の中にはしっかりと全ての話がき刻みこまれてる。まだまだ記憶の少ない俺は、なんでもすぐ

に頭に入ってくる。

便利なようで、若干不安もある。

昔の俺が記憶を失った理由がもし、事を覚えすぎてあふれ出てしまったとかなら、俺はまた記憶を失ってしまう。

そうでないことを祈るばかりだ……。

部屋に戻った俺は、ベッドに寝転んだ。

特に疲れていたわけじゃないのに、なぜか真っ先にベッドへ向かった。

「はあ……」

俺は、濃いため息を漏らした。

理由は自分でもよく分からないけど、多分疲れとかそういう類のものでは無い。

「暇だな……こんな時って何をすればいいんだ？ 散歩とかかな？」

でも今の俺には、歩く気力が湧き出てこなかった。

その理由も分からない。

ついに俺は、目を閉じた。ここまできたら寝るしかない。

「レグオズはどうだった」

「ふっ。やはり反応指数は軽く10000オーバー。そろそろ武器を教えてやる時期だろ？」

この城の廊下でチェイグティとロウクゴットが話をしていた。

「それを導く役目が……ティーゴストだ。昨日、グノウ様がそう言った」

その昨日の会話は、グノウとチェイグティの2人だけで、暗い薄暗い部屋で行われていた。

「ふっ、わざわざ様までつける必要があるのか？ 特にお前がな」

ロウクゴットは軽く鼻で笑った。

「どういう意味だ。あのお方は絶対的な存在だ」

チエイグティが目をぎらつかせ、ロウクゴットをにらみつけた。

「おーおー怖い怖い。ま、お前の思惑通りにことが進むかどうかは……アイツ次第だな」

「これ以上、的外れなことをいえば殺すぞ」

「……やってみるか？」

「……上等だ！」

互いをにらみ付け合った2人は広い廊下をまたぐように間合いを取った。

「吹き荒れ、我に風の魂を……」

チエイグティが右手を天に伸ばし、そうつぶやいた。

「激しく鳴きを上げ、我に雷の魂を……」

それに対しロウクゴットは、両手を横に広げた。

そしてその時……

チエイグティの掲げた手に激しい風がまとわりついた。その風は、徐々に何かを形作っていく。そして風は大きな槌へと変化した。その槌は青い色をし、奇妙な形をしている。長く、先は2つに分かれている。

それに対し、ロウクゴットの両手には、雷のようなものがまとわりついている。その雷も何かを形作っていく。そして、その雷は各手に槍を生み出した。金色の刀身で、刃は両頂点についている。刃先は鋭くとがり、全てを貫くような、そんな感じさえる。

「さあ、殺し合いだ！」

- 28 - 26話：武器発見への……

「鏡^{テネブラ}」としての第四日目。

俺はいつもどおり、ベッドから起き上がって目をこすった。
周りを見渡すと、今日もドア付近の壁に指令の紙張つてあるのが
見えた。

俺は起き上がり、ドアに近寄った。
するとその紙には、

今日は厳しいトレーニングになる。気を引き締め、トレーニング
グルームへ向かえ。

「厳しい……。なんか不安だな」

俺はこれまで、なんとも無い修行？をやってきた。
グノウが冗談を言うことは無いだろうから、多分厳しいって言う
のは本当だ。

俺はなんだか、不安になってきた。

俺は、いろんな不安にかられながらドアを開けた。
そしたら……

「え！？」

廊下の白い柵に、ロウクゴットが傷だらけでもたれていた。

「お、おい！ 大丈夫か？」

俺はロウクゴットの肩を何度もたたいたり、揺さぶったりしたが
何の反応も無い。

でも息はあるようだ。

「どうしよう……」

しばらく考えた俺は、一応俺の部屋にいらておくことに決めた。
結構重い大人の体を引きずって、ベッドに寝かせた。

「何があつたんだ？」

——その頃、チエイグティもレグオズの部屋とは少し離れた反対の廊下の隅に倒れていた。

「くつ。まさか、本気でくるとはな」

そこまで外傷は見られないチエイグティは、床に手を付き何とか起き上がった。

「もしこれがグノウにバレたらどうなるか……」

チエイグティは歯をギリツとかみ締めて、不安からくる苛立ちを露にすると、右腕を左手で押さえながら歩き出した。そしてそのまま自分の部屋へと入っていった。

「誰かと戦ったのか？」

俺は、ベッドに横たわるロウクゴットの体の傷を見て、そう分析した。

そしたらその時、

「チエイグティとだ。組織内部での抗争など無様な事だ」

突然俺の背後でグノウの声がした。

俺はすぐに、後ろを振り向いた。その時俺はちょっと驚いたせいで、心臓の鼓動が早くなっていた。

そこには予想通り、グノウがいた。

「グノウ……いつの間に」

「造作も無いことだ」

俺に気づかれないように、後ろに忍び寄ったのか？

でもそうだとしたら、ドアを開ける音が聞こえるだろうし。

（闇の渦か？）

多分そうだと俺は、確信した。

「なんで……チエイグティと戦ったって分かるんだ？」

「傷だ。チエイグティの属性は“風”。ロウクゴットのこの傷は風で刻み込まれたんだろう」

「属性？ 属性って何だ？」

「いずれ分かる」

それだけで俺の疑問は片付けられてしまった。

誰かとのトレーニングで分かるっていうことか……

「お前は早く、トレーニングルームに行け」

グノウは右手を空間に突き出し、闇の渦を出現させた。

「ここから行ける。今日トレーニングは厳しいから気をつける」

紙に書いてあったことと同じ事をグノウは言った。

その言葉を聞いて、俺はさらに不安が広がった。

と、そんなことを言うひまはなく、俺は闇の渦に入ってしまった。

闇の渦は、奇妙だった。

見ているだけで吐き気がしそうな、黒い渦模様が道を作っている。俺は、なるべくそれを見ないように下に向きゆつくりと前へ進んだ。地面は渦模様じゃなくてただの真っ黒な道。それは見えていても何もない。

その時、俺の目の前で突然光が輝いた。

まばゆい光に俺は目を閉じ、腕で目を覆った。

「う……。ここは……」

静かに腕を下げて目をあけるとそこは、トレーニングルームだった。

「レグオズ、ようやくきましたか」

誰かが後ろで俺を呼んだ。

俺は声のした後ろを振り向いた。

「お前は？」

俺がそう言うのと、その男は腕を組んで、目を閉じた。

「第6の組織員ティーゴストです。よろしく」

ティーゴストと言ったその男は、長く前にたれた紫色の髪をしている。深く染まった紫色の瞳はすべてを飲み込みそうな感じがする。見た目からして物静かな性格っぽい。

「さて、今日から実践的なトレーニングに入りますよ」

「実践的？」

「そうです。ですが、戦闘を行うためにはあなたには足りないものがあります」

「足りないもの？」

ティーゴストはその足りないものが分からなかった俺にあきれたのか、目を瞑りため息を吐きながら頭を横にふった。

「答えは……武器です。ゴールドシルンと戦うにしろ、守護獣と戦うにしろ、武器は欠かせない存在です」

「じゃあその武器を見つけるってことか？」

「正解です」

そう言うのと、ティーゴストは後ろを向き、数歩歩いた。俺との間合いを取ったみたいだ。

「僕の武器ならあなたの武器を簡単に引き出すことができます。ですが、少し苦痛を伴うので気をつけてください……」

「苦痛？」

すると、ティーゴストは目を瞑り、両手を体の前で合掌した。

「進む針に戻る針、我に時の魂を……」

そうティーゴストがつぶやくと、ティーゴストの手が輝き始めた。まぶしいその光に俺は、目をくらませた。

「うつ……」

思わず目を閉じた俺は、しばらくその状態のまま動くことができ

なかった。

それから少し時間がたち、目をくらみも収まったころ、俺は目をゆっくりとあげた。

すると俺の視界に、奇妙な形の鏡を持ったティーゴストが入ってきた。

「……なんだ？ その鏡？」

ティーゴストの持っている鏡の枠は藍色で、鏡そのものは銀色に光っている。

「これが僕の武器です。これで、あなたの力を引き出す」

「え？」

俺は、何がなんだかもう分からなくなっていた。

武器なんて本当に自分にあるのかも分からないのに、そんなことを言われても。って感じた。

「それでは、儀式をはじめますよ」

そう言ってティーゴストが何かを念じたら鏡が宙に浮いた。

フワフワと浮く感じではなくて、空中に完全に付いている感じた。

「これでどうやって武器を見つけるんだ？」

「……あなたは只、じっとしてればいいのです」

「……」

こいつの言葉は意味が分からない。奥が深いというわけでもなく、只意味が分からない。俺をからかっているのか？ っていうくらい、腹が立つ。記憶の中では一番の腹が立った出来事だ。

「心のすべてを解き放て！」

「！」

ティーゴストがそう叫んだとほぼ同時に浮いている鏡が、俺に向かって輝く光を放出した。

これで何度目だろうか。光に目をくらませられるのは……。

今回の光は今まで一番きつかった。なかなか収まらないし、威力

も強い。

そしてようやく、光が収まった。

俺が目を開けるとそこは……

たくさんの不気味な時計がたくさん浮いている、真っ黒な、トレ
ーニングルームとは別の部屋だった。

部屋というよりは空間かもしれない。

明かりはないけど周りの景色はすべて見える。

「どこだ……ココ？」

俺が一人でそうつぶやいたその時、

『お前の精神世界だ』

俺の背後で聞いたことの無い男の声がした。

すぐさま後ろを振り向いたがそこには誰もいない。

「誰だ！」

そう叫んでも返事はこないし、姿も見せない。

「ティーゴストはいるのか？」

そう言っても返事はない。

いったいどうなっているんだろうか。

そう思った俺は、とりあえず歩いてみることにした。

真っ暗なこの空間には道はない。それでも俺は手がかりを見つ
けるために歩いた。

すると……

『私が見えるか』

またさっきの声が、今度は前方から聞こえた。

「見えない」

『そうか』

「お前は……誰なんだ？」

そう聞いても返事は返ってこなかった。

その時、ふっと俺はさっきのティーゴストの言葉を思い出した。

只、じつとしてればいいのです。

（それだ！！！）

もしそれが、この声の主を見るためのかぎなのだとしたら。動かないことが重要なんだ！

俺は歩みを完全に止めて、その場でじつと立ち尽くした。

あれからどれくらいの間がたっただろう。歩みを辞めた時からもう丸一日は経過してるはずだ。

はじめはつらかったけれど、慣れればそれほどきつくはなくなってきた。

でも反応がこれだけないのは、おかしい。やっぱり動かないのは間違いだったのか。あきらめて体を動かそうとしたその時……

『待て！』

あの男の声が俺にそう叫んだ。そして俺はすぐに動こうとするのを止めた。

やっぱりこの考えは間違っていなかったんだろう。

それからまた一日ほどが経過した。

もう何も食べてないし、ずっと動いてもない。そろそろ体も精神も限界が近づいてきた。

（もうだめだ）

そう悟った俺は、ついに意識を失いかけた。それでも俺は何とか踏ん張って、耐えた。

ここであきらめたらこれまでの辛さがまったく意味を持たなくなる。

でもやっぱり俺の体は限界だった。痛さを超え始めた足、ムズム

ズする体、クラクラし始めた頭。どれをとっても、もう限界は超えていた。

（も……もう、限界だ！）

俺は、何とか耐えようとしたがもう無理だった。

重いものを吊るした糸がプツンと切れるように、力なく俺はその場に倒れた。

倒れた俺にはまだ意識があった。だが体の状態は、目も開けられないほど最悪だ。

するとその時――

『よく頑張ったな』

あの男が久々に話しかけてきた。

その声の後は、それまでは開かなかった目が突然開くようになった。

開いた目で倒れたまま上を見上げると、

「わっ！！！」

そこにいた者の姿に俺は思わず声を上げた。見た目は人間じゃ無かった。

骸骨だ。

その骸骨は、体全体にボロボロになった黒い布を纏っている。

『驚いたか？ この姿に……』

声は、今まで俺に話しかけてきていた男の声だ。

骸骨は口を動かしている。骨だけが動くのは気味が悪い。

「誰でも驚くよ……」

『ふっ』

骸骨は全く表情を変えずに鼻で笑った。

まあ、骸骨が表情なんて変えることなんて無いだろうけど……。

『もう一度聞こう。私が見えるか』

「ああ」

前までは姿は見え、声しか聞こえなかったけど今はハッキリ見えてる。

「お前は誰なんだ？ しかもココが俺の精神世界だって」

俺は今頭に浮かぶ疑問を全て骸骨に投げかけた。

骸骨はそれに少し困った表情になった。目の空洞が少し下がっている。

骸骨でも表情は変わるのか……。

さっき俺は表情は変わらないものだと思っていただけ、どうやらそうではないみたいだ。

『私は…… お前自身だ』

「えっ……？」

ますます謎が深まった俺は、目を丸くしたまま暫く動かなかった。

- 28 - 26話：武器発見への……（後書き）

読んでくれてありがとうございます！

まだまだ始まったばかりで、キャラのことも良くかけないままです。
今回初登場の骸骨キャラは、本来出す予定じゃなかったんですが、
出しちゃいましたww

一段落したら、キャラの設定紹介などを行う予定です。

もし、ここまでプロローグからここまで読んでくれた人がいたならば是非感想をお願いします！

・26話（後半）：心の対話

この骸骨が俺自身??

意味が分からない……。

俺はまだ自分自身の目を疑っている。

骸骨が喋ってるし、動いている。

色んな意味で意味が分からない。

『まあ、この状況を信じれるやつなどいないか……』

「ここは……ティーゴストのあの鏡の世界じゃないのか？」

と俺は骸骨に聞いた。

すると骸骨は、

『ティーゴスト？ あの男の名か。……あの男の力によってお前は

この精神世界へ送り込まれた』

それは何となく分かってる。と言おうとしたが、骸骨は続けて話を続けた。

『私は、お前の心を具現化したものと考えていい。誰にでも存在するものでは無いが……』

俺は何となく話が分かった。この世界では常識は元々通用しない。記憶の無い俺は、まだ戦いとか力とかを良く分からないけど。

でも誰にでも存在するものではないってどういうことなんだ？

俺は、そう聞こえた。でもまた骸骨は話を続けて話し始めた。

『お前は特殊な人間だ。あいつはそれを知っているようだ。だからこの修行を行っている』

「あいつ？」

『お前の所属する組織のボスだ』

グノウのことを言っていると理解した。

その時俺は嫌な予感がした。グノウがもしかすると俺の記憶に関わっているのかもしれない。なぜかは分からないけど、頭にその

考えがよぎった。

『…………』

その時、いきなり骸骨がさっきまでとは違って、その場で黙り込んだ。

「どうしたんだ？」

心配になった俺がそう声をかけても、全く反応しない。

（何だ？ 怖いな…………）

今の骸骨の顔はただならぬ恐怖のオーラを醸し出している。
怒っているのか何なのか…………。

『そろそろ戻るか？』

突然骸骨は顔を上げて話しはじめた。

「でも体が…………」

まだ体が動かない。動こうとしても何かに拒絶されるような感じがする。

『大丈夫だ。私に任せろ』

そういった骸骨は俺の傍でしゃがみ、背中に手を乗せた。

『私の名前はガロン。これで、武器が手に入る。また会おう…………』

「ガロン…………」

その時俺を眩い光は俺を包み込んだ。

光が消えたら光景がトレーニングルームに変わった。

「戻った」

俺は、さっきまでの最悪だった体調も完全に回復していた。体が
すごく軽く感じる。

「お疲れ様です」

ティーゴストが俺の背後から歩き、俺を通り過ぎた。

「結局俺の精神世界だっていう、あの世界は何なんだ？ 武器を得

ることに意味があるのか？」

「誰かと会いましたか？」

「え？」

俺はその問いに頭を悩ませた。それまでは、体が軽くなったという安心感とかで忘れていたが、俺はあの世界で骸骨に会った。

「ガロン……」

去り際にあの骸骨が名乗った。それを俺は今思い出した。

「会えたようですね。では……今回の修行は終わりですので、部屋に戻ってください」

そういつとティーゴストは、長い前髪をひらつとさせた。そしてそのまま部屋を出て行った。

「……。武器、見つかってないのに……」

俺は少しの不安と疑問が頭に浮き出てきた。

でも、今はティーゴストの言うとおりにしたほうがいいだろう。と思った俺も、部屋を出て自分の部屋に戻った。

部屋に戻ったらそこにはもう、グノウとティーゴストの姿は無かった。

「そつえば、怪我してたんだよなアイツ。グノウもやってきて……」

すごく懐かしく感じる。ちょっと前のことなのに、ずいぶん昔のことのように感じる。

「はぁ……」

突然体の力が抜けた俺は、ベッドに寝転んだ。天井を見上げたまま、無心でずっと。

この数日、ありえないことが起こった。

自分が自分の精神世界に行って、骸骨・ガロンと出会った。その骸骨は……俺が話す前にいつも話を始めていた。まるで、俺の心を

読んでいるかのように……。

「！」

俺はその時、全ての謎が解けたような、そんな感覚になった。

「そうか、そういうことか。ガロンは俺自身と言った。つまり……」
ガロンは俺の考えていることを全て分かっている。それなら、話を聞かずに次々と話を進めることにも納得がいく。

（そういうことなら今俺がガロンに話しかけることも可能なんだろうか？）

『その通りだ』

俺の中でガロンがそう言った。不思議だ。この感覚は空耳を聞いている感じた。

（お前は俺の心を具現化した存在なんだろう？　じゃあ、こっちの世界に来ることは出来ないのか？）

『それは分からない。だが、私の力をお前が使うことは可能だ』

（ガロンの力？）

『そうだ。そもそも武器と言うのはその者の心の力だ』

（つまり、俺はガロンと一緒に戦うのか？）

『結果的にはそうなるな』

そんなやり取り続けていた。

——その頃、グノウは自室にチェイグティとロウクゴットを呼び出していた。

「組織内での抗争は違反に値する……」

グノウは静かに怒りを表している。

「申し訳ありません、グノウ様」

チェイグティは片膝を付いて頭を下げた。これは本心ではないかもしれないが、今はそんなことは言っていられない。

「すみません」

ロウクゴツトは体に包帯を巻いた状態でその場で立ったまま、一度頭を下げた。

「2人にはそれ相応の罰が必要だ」

「何なりとお申し付けください」

チェイグティは汗を一筋たらし、そう言った。その表情は焦りからか、やや曇っている。

「上級守護獣を2匹拘束し、連れて来い」

「！ 2匹……」

ロウクゴツトの何か詰まったような表情から、その任務の難しさが窺える。

「分かりました。……行くぞ、ロウクゴツト」

チェイグティは立ち上がると、ロウクゴツトの体を引っ張り部屋を出て行った。

「フフフ。さてどう出るか……」

1人部屋に残ったグノウは不敵な笑みを浮かべた。

- 26話（後半）：心の対話（後書き）

久々の更新でした。

話はもう出来上がってたんですが、投稿するのをずっと忘れてまして……。

とまあ、そろそろ夏休みと言っことでこれからは積極的に定期的に更新していくので……！！

小説のほうは、まだまだ謎な部分も多いし明かされて無い面も多いです。

バトルにも中々入っていない状況ですし。。

ではもしよければ、ご意見・ご感想・評価のほうをお願いします。

目が覚めた俺は、いつもどおり朝日に体を照らされながら胸を押さえた。

「俺の中に……あんなやつがいたなんてな」

俺はガロンの姿を頭に思い浮かべ、心の変な感じを漏らした。

「今日はどんな指令なんだ？」

俺は、前日の中途半端な修行にまだ納得がいかなかった。

俺は指令の書いてある紙・指令紙しれいしって呼ぼうか。を、探した。しばらく部屋の隅々を探したが、どこにもそれらしきものは無かった。

「？ 無い」

（もしかすると……）

もしかすると、昨日のトレーニングの続きをやるのかもしれないと思った俺は、部屋を出てトレーニングルームに向かった。

トレーニングルームに着いた俺は、急いで中に入った。

だが……辺りを何度も見渡したが、ここには誰もいなかった。

「誰も……いない」

その後、悩みに悩んだ俺はやっぱり自分の部屋に戻ることにした。誰かいないか探し回っているうちに部屋の中央まできていた俺は、顎に手を当てながら扉のほうへゆっくりと歩いて向かった。考え事をしながら歩いていると……

「わっ！」

突然俺の前に出てきた誰かにぶつかった。

そこまで痛くは無かったけど、意識はしてなかったうえでの突然

の衝撃は大きかった。そのせいで俺は体のバランスを崩してその場にしりもちをついた。

「わりい、痛かったか？」

俺はしりもちをついたまま顔を見上げた。

するとそこには、俺が機関に入りたての頃、声をかけてくれたベゴンが立っていた。

ベゴンは慌てて俺のみを案じ、手を差し伸べてくれた。

俺はその手を握り、起き上がった。

「ありがとう」

「いや、まあ今のは俺が悪かったろ」

ベゴンは少し顔赤くして、右頬をポリポリと掻いた。
恥ずかしがってるのか？

「つと、そんなことより、お前なんでココにいるんだ？」

ベゴンはそう俺に聞いてきた。

「え……それが、今日は部屋に修行の居場所とかが書いてある紙が無かったんだ。で、どこにいいのかわからなくて、ココに来たんだ」

俺は理由を正直に言った。

「なるほどな。まあ、教えといてやる」

「？」

「指令の無い日ってのは、それ自体が指令なんだ」

俺はますます意味が分からなくなった。

「つまり……自分で見つけ出せて事だ」

「自分で見つけ出す……？」

俺がそう聞くとベゴンは少し間を空けて、腰に手を当てて一つため息を吐いた。

「いつまで覗いてんだっよお！」

「えっ!？」

ベゴンは突然体を反転させて、手から水を水の塊を扉に向けて放った。水の塊は扉に直撃しただけで、ドアが壊したりはしなかった。よく見ると扉がほんの少し開いている。

すると、扉が全開して見たことの無い男が入ってきた。でもその男は組織の服を着ているから“鏡”^{デネブラ}の一員なんだろう。

「やれやれ、そんなに怒ることは無いだろう」

「……何のようだ」

その男はドアを閉め、俺たちのほうに向かって歩いてきた。

「まあ、その小僧を見に来たって感じだな」

「え……俺を？」

男は俺を指差し、そう言った。

「様子を見にきたんだ。今日のお前の相手は俺だからな」

「ばらしちまつていいのによ？」

ベゴンが男にそう言った。

「退屈してたところだ。しかも今日の修行はなるべく時間をかけた方がいい」

男はそう言うのと、指をパチッ!と鳴らした。

すると、トレーニングルームの壁全部に結界のようなものが張られた。その結界は紫がかっていてずっと見ていたら吸い込まれそうな感じがする。

「おい! 結界なんて張ったら俺でられねえじゃねえかよ!」

「ふっ。今日の修行はな、お前も合同なんだよ」

「!」

ベゴンと男のそんなやり取りをただ呆然と見ていた俺に、突然背後から何かに体を捕まれた。

「うわ!」

俺を捕えていたのは、見たことも無い化け物だった。

高い鼻に鋭く尖った赤い目、体全体は細く、その手には木で出来た棍棒が握られている。この化け物は棍棒を持ったまま、俺の脇の下から手を通し、体を捕えていた。

「なんだこいつ……」

俺は命いっぱい力を入れたが、化け物の力は予想以上に強く、ビクともしなかった。

「ゴブリンか。お前が出したのか？」

ベゴンが俺のほうを1回見た後、男にそう言った。

「ああ、この結界には守護獣を呼び出す力がある。とまあ、下級しか来ないけどな」

俺は2人の会話を何となく聞いたまま、暴れていた。足をばたつかせたり、肘で化け物の体を打つてみたり。けど、やっぱりびくともしない。

「レグオズ！ 心の力を解放しろ。お前にはもうその能力がある」

男がそう言ったのを聞いて、俺はガロンの事を思い出した。

（そういえばアイツ、俺と一緒に戦う。みたいな事言ってたよな）
『そうだ』

俺の中でガロンがそう返してきた。

（ガロン！）

『イメージするんだ。お前の理想とする、敵を滅却す武器は何だ？』

（敵を滅却す？ そんなの、普通に剣とか銃とかじゃないのか？）

俺には、滅却すということが良く分からなかった。過去の記憶を失った俺には、わからなかった。だけど、滅却すと言う事がどういうことかは分かっていたから、この答えにたどり着く事が出来た。

『そうか、決定だ』

（え？）

すると突然、俺の体が金色に光りだした。なぜか眩しく無い。この光に驚いたのか、化け物は俺の体を離し、その場から数歩後ろに下がった。

「出るか」

「ああ」

ベゴンと男も、俺のこの摩訶不思議な状態を只じっと見ている。

光はだんだん収束していき、そしてまたその光はまた大きく輝き、俺の体全体を包んだ。

「どうなるんだよ、これ」

俺はついそう漏らした。

光は徐々にまた、収束していった。

そして……光は一度最大の大きな輝きを放つと、一気に爆発するように弾けとんだ。

さすがに驚いた俺は、目を思い切り瞑った。

少しして目を開け、体を見渡すと……

「！」

俺は鞘に収められている大きな剣を背中に背負い、組織服の腰部分に拳銃を二挺^{にちよう}装備していた。体には剣を装備するための留め具も付いている。

俺は鞘からその剣を抜いてみると、その威圧感に呑み込まれそうになった。白く染まった柄、両端に黒い髑髏の頭の付いている黒い鍔、銀色と漆黒に光る刀身。どれをとっても、その迫力とはてつもないものだ。

腰についている二挺の拳銃も普通とは違っていた。タイプとしては一般的な自動拳銃だが、銃口は上下2つあり、銃身は普通と比べて少し長く、奇妙な模様が描かれている。グリップ部分は太く、ココにも奇妙の同じ模様が描かれている。よく見るとその模様は、髑

體の頭から茨のようなものが四方八方に散らばっている絵だ。二挺の拳銃は一本が全体的に黒く、もう一本は全体的に白い。

俺は、自分の突然の変化に心を惑わした。

「これが俺の武器……」

何ともいえない心境に浸されていると……

「来るぞ、後ろだ！ 小僧！」

男の大きな声で、俺は目を覚ました。俺の心は今まで別の世界に行っていたのかもしれない。

俺はとつさに後ろを振り向くと、化け物が棍棒を振り上げ、俺に向かって跳び上がってきた。

化け物は鬼のような形相で、棍棒を俺に向かって振り下ろした。

俺はこの突然の出来事に体が動かせなかった。

「やばい！」

目を瞑ろうとしたその時、

『剣を振るえ！』

「！」

ガロンが俺にそう叫んだ。

俺は言われるがままに手に握っていた、剣を一閃。右から左に振るった。もちろん、目を瞑ったまま……

俺は恐る恐る目を開けると、そこには体が真つ二つに裂けたあの化け物が床に横たわっていた。俺の剣には血が付いている。黒い刀身だから良くは見えないが、確実に血がべつとりと付いている。

「え……。俺が、やった……のか？」

俺は自分のした行為が信じられなかった。自分がこの手で生物を殺めた。俺はショッキングな気分になった。

その時……

「！ うっぁ……！！！」

激しい頭痛が俺を襲った。俺は握っていた剣を地面に落とし、頭を抑え、その場にうずくまった。

「お、おい大丈夫かよ！」

ベゴンが俺に何かを言っている。だけど、よく聞き取れない。

俺の脳裏で何かのイメージがよみがえる。

「止める！ ゼロ！」

「黙れ！ あんたになんか命令される筋合いは無い」

俺が大人の男と話している。

この怖い口調のやつが俺？ そんなのありえない。しかも、ゼロって誰だ？ 俺の本当の名前？ 違う、これは俺じゃない。でも、この顔は俺だ……！！

「止めなさいゼロ。母の言うことが聞けないの？」

「あんたを母親と思ったことは一度も無い……！」

今度は女の人はなしている。酷いことを言ってる。女の方はショクだったのか、倒れてしまってる。

それよりここはどこなんだ？

城？ 男と女の後ろに城のようなものが見える。周りには血まみれの兵士が大勢……

まさか、俺がやったのか？

嘘だ……

「！……ココはどこだ？」

俺は静かに目を開けた。頭痛はもう治まってる。

俺の横に誰かが立っている。

「だれ？……」

「おっ、目え覚めたか！」

ベゴンだ。

「俺がココまで運んだんだよ。だいぶうなされてたぞ？ その証拠に……今日はあの修行の日から一週間がたってる」

「え！？」

俺は思わず体を起こした。

その時初めて、ここが自室だということが分かった。

「ずっと……寝てたのか」

「ああ。俺もついさっき、様子を見に来たんだ」

「ありがとう」

ふっと横を見ると、クローゼットの前に剣と銃が立て掛けられていた。

「やつは夢じゃないか……」

「……まあ、ゆっくり休めよ。グノウも休暇をくれるだろうからな」
ベゴンは俺のそいい残して部屋を出て行った。

「……」

ガシャン！！！！

「！」

「わりい、もう一つ！ 後でグノウのところへ行けよ！ じゃあな！」

ベゴンが突然戻ってきて、一瞬で帰っていった。

俺の心臓が激しく鼓動を打っている。

「あれは……本当に俺だったのか？」

俺は、脳裏に焼きついている、あのイメージを忘れることが出来なかった。

今もまだ、信じられない。

本当にアレが俺なら……

「俺、最低だ……」

- 25 - 18話：武器（後書き）

やっと、武器を出すことが出来ました。

では、次をお楽しみに～

できたら感想をくれたら嬉しいです。

- 18話（後半）：心

「失礼します」

俺はそついいながら一室の扉をノックした。

俺は扉を開けるとそこは、明かりがうつすらとしか付いていない部屋だった。

「レグオズ……。目が覚めたか」

そこではグノウが黒い椅子に座っていた。

「はい。心配かけてすみませんでした……」

俺は、こういうときは誤るものだと思って、とっさに謝った。

「だれも……心配などしていない」

グノウの言葉に俺は、金槌で胸を打たれたような気分になった。

グノウは俺を心配していなかったってことだよな。俺は悲しくなってきた。

「レグオズ……武器を見つけたそうだな」

「え、はい」

「見せてみる」

グノウは話を突然変えてきた。グノウは空気を読むような人間じゃないし、そういう心を持ち合わせていないやつと言うのは、もうさっきで分かった。

俺はグノウの言うがままに、武器を取り出そうとした。

「あ……」

武器は自室においてきたままだということに今気づいた。

「？ どうした」

「その……部屋に忘れてきた」

「一つ覚えておけ。武器は心の力。自分の意思で呼び出すことが出来る」

心の力。ガロンがそういつていたような気がする。

「失礼しました」

俺はそういつて顔を下にうつむけて部屋を出て行った。

一方グノウは……

「あいつを任務に行かせる。」

「どこへ？」

グノウがそう呟くと、グノウの背後から男がすつと出てきた。

部屋の暗い陰に隠れてちょうど顔は見えない。服は組織のものだ。

「ハイラントだ」

「……！　いくらなんでも早すぎる！　何を目的に？」

タイラントとは宇宙最大の世界。そこに自ら危険を冒して、新人を向かわせるという無謀なことに、男が反論するのは無理も無い。

「ゴールドシルン是世界が崩壊し始めている事に関して、それが人の意思によるものだと感じている。そしていつかは、我々にたどり着くだろう。それなら、今あいつらを潰しても変わりはないだろう？」

「……」

男はそのまま黙ったままだった。

グノウの言い分は正しいと取ったのだろう。

「ゴールドシルンには近づけはしない。まずは、その周りの弱小中堅国から順に潰していく。実行は明日からだ」

「……御意」

男はそういうと、ドアに向かって歩き始めた。そしてその時、謎だった男の姿が露になった。

顔には不気味な仮面をつけ、仮面からは右目だけが覗いている。その目は青く輝いている。

「マスク……外したほうが良いんじゃないか？」

「わーってますよ」

男はそういいながらドアを開け、出て行った。

「俺の……武器」

部屋に戻った俺はベッドに座り、クローゼットに立て掛けられている銃と剣を見た。

複雑な気持ちだった。

初めて“殺し”を体験した。それが人間でなくても、それが敵の化け物だろうと関係は無い。あの時はショックを受けた。この手で生物の生命を裁ったということに俺は、胸を打たれるような気分になった。それに、直後のあの出来事。俺の脳を襲った、あの映像。あれは俺じゃないと信じたいけど、心のどこかで俺なんじゃないか。って思ってる。

俺はこれから組織員として、守護獣とか敵と戦っていかなくちゃいけない。でも、敵を斬ったりした時にまたあの映像が出てくるかもしれない。もうあんなのはゴメンだ……。

その時、俺の部屋を誰かがノックした。

「おい、入るぜ」

その声と共にベゴンが入ってきた。

「グノウのところには行ったのか？」

「ああ」

「どうした？ 元氣ねえな」

俺は、ベゴンといると安心するようになった。つい最近の出来事だ。

だから俺はベゴンなら安心だ。と、俺のさっき考えていたことを話した。

「……そんなのが頭の中に入ってきたのか。でもまあ、お前じゃね

えって」

そういつてベゴンは俺の方をポンと2回軽くたたいた。励ましてくれてるんだろうか。

「またすぐに任務が始まるだろ？ 絶対に戦闘はあると思う」

「……レグオズ、実はな……」

ベゴンは神妙な顔つきで何かを話そうとした。

その時、今度はノック無しで誰かが入ってきた。

「レグオズ。知らせだ」

チエイグティだ。

よく見るとチエイグティの服のズボンの裾が少し破れてる。

「それ……どうしたんだ？」

俺はそこを指差した。

「お前には関係ない。それよりも……」

「守護獣にやられたな？ しかもお前がやられるとなると……上級だ」

「！」

その言葉にチエイグティは目を大きく開いた。

「図星つてわけだ。ロウクゴットも一緒なんだろう？ まあ、さっきやつから聞いたんだけどな。で、2匹の捕獲に失敗。成功したのは1匹だけか……」

「お前にも関係の無い話だ。その任務は続いている。もう1匹も捕獲する」

「へえ」。ま、頑張れよ」

ベゴンはそういつと、チエイグティの肩を1回叩いた。そしてそのまま部屋を出て行った。

俺に何か話そうとしてたけど、なんだったんだろ？

チエイグティは叩かれた肩を、汚いものをのけるみたいに払って、俺に目を向けた。

「明日任務に出てもらう。初めての外出任務だ。場所はタイラント

のジュゼーネブ、グレミオ、セイントシュタイン・ホリドマの4国だ。この国たちにはそれぞれ守護獣が守り神として守護している。それを討伐しろ、という任務だ。分かったなら準備をしてもう寝ろ。油断すれば死ぬぞ」

チエイグティは俺が質問すら出来ないような早さで話して部屋から出て行った。

「やつぱ……戦いか」

俺は静かに眼を閉じた。

明日に来る、嫌な戦いのために俺はそのまま眠った。

- 18話（後半）：心（後書き）

やっとバトルに入れます!!!
次から本格的に始まるので、どうぞお願いします

- 17話 - ? : 緑の楽園

「よし、揃ったな！」

闇の渦の前でベゴンが周りを見渡しながらそう言った。

ベゴンのほかにココには、俺・^{レグオス}名前の知らない綺麗な組織員の女の人・これまた名前の知らないダンディな男が集まっていた。

そもそも俺たちがなんでこんなところにいるのかと言うと、それは2時間ほど前にさかのぼる。

いつもどおりベッドから起きた俺は、クローゼットに張り紙をしてあるのを見つけた。そこには、しっかりと準備を整えて12階のトリップ場に来い。って書かれてた。俺は剣を背中に差し、2挺の拳銃を腰に装備した。12階に上るのはだいぶ大変だった。階段が途中でなくなっただけと思ったら、そこからは自分の力でジャンプしていなくなっちゃいけなかった。ここまででもう1時間45分くらいは浪費してただろうな。

で、やっとジャンプが届いた俺は12階に到着した。

そこに着いた時は、自分の目を疑った。この12階には無数の闇の渦が、部屋中に散らばっていた。

俺が目を見ろキョロキョロさせてたら、そこにはベゴンと知らないやつが2人いた。俺はすぐさまそこに近づいた。

そして、今に至る。

「つと、レグオス。お前こいつらのこと知らねえだろ？ ほら、2人とも自己紹介しろよ」

ベゴンが女と男にそういった。

するとまずは綺麗な女の人が、俺に顔を向けて話し始めた。

「私の名前はオゴット。第8の組織員よ。よろしく」

そう言ってオゴットは笑顔で俺に握手を求めてきた。俺はちよつと戸惑いっつも手を差し伸べた。

俺はちよつと恥ずかしかった。

こんな美貌の持ち主が俺に握手を求めてくる。理由は分からないけど恥ずかしかった。

オゴットは本当に綺麗な人だ。綺麗なオレンジの瞳にサラサラの黒く長い髪。スタイルも抜群だ。

さっき初めて見た時は、怖そうだ。って印象だったけど今は全然違う。すごい優しくて、ベゴンと同じくらい俺の中では接しやすい。まだ会ったばかりだから何とも言えないけど。

握手をし終わると、今度はもう1人の男が自己紹介を始めた。

「第10の組織員、エイグスだ。よろしく頼むぞレグオズ」

エイグスはずっと腕を組んだままだ。見ただけで分かる。凄い冷静な人なんだろうな、って。

でも意外だったのは俺の一つ先輩なだけだったこと。チエイグテイもそうだったけど、番号が下だからといって、位が下ってわけじゃないらしい。

エイグスは短髪の黒髪で、見たものを射抜くような水色の瞳をしている。何より特徴的なのは右耳につけられたピアスだ。そのピアスは馬の首から上を模している。まさに伊達男って感じがする。

チエイグテイとかグノウよりは全然話しやすそうで良かった。

俺にとって初めての出張任務は、安心して始めることが出来そうだった。

「よし、じゃあ行くぞ！」

そついうとベゴンは数多の闇の渦のうちの一つに入っていた。オゴットとエイグスもそれに続いて入っていく。俺もそれに続い

た。

闇の渦は相変わらず気味悪かった。
空間全体が黒い渦を無数に渦巻いていて、それを見ると自然と頭がくらくらしてくる。

特に会話が無いまま俺たちはずっと歩き続けて、闇の渦から出た。

闇の渦を出た世界は俺の知らない世界だった。

広大な自然が広がる世界。

周りが見渡す限りの緑の世界。建物は何も見えず、ただたくさん
の自然が大きく広がっている。全体的に涼しい風が吹いている。

「っと、まずは緑の楽園グレミオから行くか」

ベゴンは手に持っていた紙を見るとそう呟いて、西の方角に歩き出した。

ガーディアン

「なあ、俺たちは今日守護獣を討伐しに行くんだろ？ で、4ヶ所
行かなくちゃ行けない。じゃあ、ちょうど4人なんだから手分けし
たほうが早くないか？」

俺はベゴンのそばに駆け寄ってそう聞いた。

「ふっ、じゃあ1人で行ってみるか、レグオズ」

エイグスが後ろでそう言った。その言葉で俺は、わかってしまっ
た。その行為がどれだけ危険なのかということ。

「……止めとく」

俺はとっさにそう呟いた。

「おいおい、びびんなよ？ 大丈夫だって、俺らが付いてる。それ
に今回は……」

ベゴンは俺の肩に手を置くと、横目でオゴットの方を見た。
「何？」

それに気づいたオゴットはベゴンを少しにらみつけた。

さっき俺に見せた笑顔とは裏腹に、その表情は怖かった。

「いーや、何でもねえ」

ベゴンは左手を横に振った。

（絶対なんかあるんだろうな）

俺はそう思った。

—— どれだけ歩いても景色が変わらない。もうかれこれ40分位歩いたかもしれない。

俺は只でさえちょっと重たい剣を持ちながら歩いてる。疲労は他の3人に比べて多いはずだ。

「武器が重いのなら捨てたらどうだ、レグオズ」
エイグスは毎回俺を茶化してくる。

「そーいえばそうだな。なんで武器を持ち歩いてるんだ？ それじゃチカラが逃げるかしらねーぜ？」

「え？ どういう……」

「普通、武器って言うのは隠しておくものなの。何故だか分かる？」
オゴットは俺に対しては凄い優しく接してくれる。何か、懐かしい感じた。

俺は暫く考えたけど、答えは出てこなかった。

「わかんない」

「じゃ、答えは……あたしが教えてあげる……！！」

「えー！？」

俺がすぐさま後ろにいるオゴットの方を振り向くと、オゴットは、俺に背を向けて両手をクロスしていた。

「共鳴し、我に音の魂を……」

オゴットがそう呟くと突然オゴットの両手が突然紫に輝いた。その紫の光は徐々に形を変えて、オゴットの体にまわり付いた。そして、光は大きな鈴に変化した。オゴットは片手ずつ2つの大きな鈴を持っている。その2つの鈴は、太く長い豪華な紫の布で繋がっている。その布はオゴットの首の後ろを通り、鈴についている。

「これが……オゴツトの武器なのか？」

「そうよ。……出てきなさい、守護獣」

オゴツトはずっと芝生の地面を見つめてる。

すると、突然緑の芝生が盛りかえって中から何かが出てきた。

「下級ね……」

それは前にも見たことがあるようなやつだった。

「あ……あの時の化け物だ」

俺が修行をして武器を見つけたときのあの化け物。俺のトラウマ的な存在だ。

オゴツトは華麗に体をくると回し始めた。それに合わせて鈴も遠心力によって回りだした。オゴツトは徐々に回転を止めると、2つの鈴の布を軽く左右に振った。

すると、2つの鈴から綺麗な鈴の音が鳴り響く。

耳を貫くようなその鈴の音は、俺にはあんまり聞こえなかった。

その音になった瞬間、化け物が頭を抱えて悶えだした。

「ウギユ……ギャ、グギャアアア！」

そして……

「……」

ボン！

破裂音と共に化け物の体が激しく爆発した。俺は目を疑った。

粉々になった化け物の体はいろんなところに散らばって、血も芝生にべっとりと付いてる。

「オゴツト、今の……何なんだ？」

「武器の解放と技よ。見て分かる通りね」

「解……放？」

「そう、解放。普段武器っていうのは、心に封じ込めておくものなの。そうじゃないとチカラがあふれて逃げ出してしまう。戦闘の度

に呼び出せすのが面倒だけど……それは仕方が無いわ」

つまり、俺がこうしている間も俺の銃と剣からはチカラが抜けてるってことか。

「じゃ、じゃあ、早くしないと……でも、どうやってやるんだ？」

「それは俺が教えるぜ！」

ベゴンが俺のそばに近寄ってきた。

オゴツトの武器をいつの間にかまた消えていた。

「武器を地面に置いて唱えるんだ。『封武心中』^{ふうぶしんちゅう}ってな」

「ふーぶ……」

『『封武心中』』

俺は、もちろん言葉の意味は分からなかったが、とにかく今は武器を心にしまうことだけを考えて。

俺はまず剣を背中から抜いて芝生に置いた。そして銃も2挺とも芝生に置いた。

そして俺は言われたとおりに唱えた。

「ふうぶしんちゅう」

俺は何か、頼り気のない話し方だったかもしれないけれど、それはまあ、気にしないでおこう。

俺がそう唱えると武器が輝きに包まれて宙に浮き、俺の胸の中へと入っていった。

触られたような感覚もしなかったし、何の違和感も無かった。

でも、やっぱり不思議な出来事に俺は心を惑わした。胸を手で押さえて、少し黙っていた。

「よし、完了だ！ 武器を呼び出すときのことはまた後で教えてやる。今は……早く守護獣くを倒しに行かないとな」

そういつてベゴンは俺の腕を少し引いて、先導して進み始めた。

少し歩いていたら徐々に町が見えてきた。

「町……」

「あれが、緑の楽園グレミオ。たぶん守護獣は中級だろうな。だれが行く？」

ベゴンがそう俺たち皆に問いかけたけど、誰も返事をしなかった。
「……レグオズでいいんじゃないか？ 中級といっても所詮はグレミオの守護獣。チンケなやつだろう。それに、レグオズのチカラも見てみたいしな」

やっぱり俺はエイグスが苦手かもしれない。俺を茶化してるのかな。

「うーん。どうだ？ レグオズ。やってみるか？」

「え……どうしようかな。……分かった。やってみる」

「そうか、決まりだ」

ベゴンはエイグスと違って話しやすいな。

俺はそう思った。

そうこうしてるうちに、町の入り口までたどり着いていた。

町はとっても綺麗だった。

町は見渡す限りの自然の世界。建物には全て蔦が絡まっ
ていて、ところどころヤシの木が生えている。小さな湖もところどころにあるみたいだ。

建物事態はそんなに多くは無いけど、町の遥か先に大きな建物が見える。その建物の屋根には十字架が飾られている。

「よし、行くぞ！」

ベゴンは声を張り上げた。

そして俺たちは、一つ目の町・緑の楽園グレミオに入っていた。

- 17話 } ? : 緑の楽園 (後書き)

中途半端ですね。。

ここからは一日のことが長く続くので、そろそろショートカットに入るかもしれませんwww
いつきに-5話まで飛ばすとかの荒業も出るかも。

- 17話 - (2) : 意識の変化

グレミオを歩き回っていた俺たちは、町で一番目に付いた十字架マークの建物の前に立った。

町の人たちは俺たちの異様な服装を見ても、不思議がることはない。そういう世界なんだろう。

「ここからチカラを感じる。ここに眠ってんだろっとな、守護獣は」
ベゴンはそういうと、両開きの大きなドアを開けた。

中はまるで教会みたいだった。教会は昔にも見たことがあるようだ。そのおかげでここがどのような場所かを理解することが出来た。見る限りでは中にはほとんど人がいないようだ。

俺たちが中に入ると、喪服のような服を着た40歳くらいの大人の男が近寄ってきた。神父だろうか？

「なんのようでございましょうか。 だいてんどうし 大天導獅様なら不在でござい
ますが だいてんどうし」

「大天導獅などには興味がない。俺たちが聞きたいのは、守護獣の事だ」

エイグスがずっとベゴン前に出て、男にそういった。

「我々の守護獣様はグリトラ様でございます」

「どこにいる？」

「今はこの清らかな聖堂の奥・清めの石像にて眠っております事でしょう。何とも近く災いが起きるそうで……」

「……すまん。その災いは、近くじゃないな。今からだ」
「？」

エイグスは突然鬼のような形相になると、神父を右手で思い切り殴り飛ばした。

神父は吹き飛び、立ち並ぶ椅子に体をぶつけた。
凄く痛そうな顔をしている。

「キヤー」

中にいた、人たちが悲鳴を上げてる。

俺は、その悲鳴を上げる顔を見て、頭が混乱し始めた。

「はぁ……はぁ……。まただ……」

俺の頭にまたアノ映像が流れる。

嫌だったのに、また見ることになるなんて……

幸い今回は頭痛はない。俺は強く目を瞑り、必死で違うことを考えようとしたけど無理だった。

ちよつとしたらあの映像は突然流れなくなった。

「出て来い、守護獣！」

エイグスが石像に向かってそう叫んでいる。

すると、女神の姿の石像から浮き出てくるように何かが出てきた。出てきた何かは大きく長い体をくねっている。見た目は完全に蛇だ。赤い目とチヨロチヨロと舌を出している。みためは守り神って言うよりかは悪魔っぽい事に、俺は違和感を感じた。

「キサマラ、何者ダ！ 我ニナンノヨウダ！」

「レグオズ、倒せ。こいつは見たところ、完全の起きていないようだ。叩くなら今のうち……」

そうは言われて俺は武器の出し方を知らない。

俺は大人に頼る子供みたいに、ベゴンを見た。

そしたらベゴンは、

「解放の仕方はお前の心が知ってる。聞いてみな」とだけ言った。

「心………ガロンか！」

俺は目を閉じてガロンとの対話を始めた。

『久しぶりだなレグオズ。早速戦闘だな……』

（早く解放の仕方を教えてくれよ。）

『叫べ。「煌めけ、光の魂を」とな。……………ヴリトラ……………』

（え？ 最後なんか言ったか？）

『いや、なんでもない』

（じゃあ、また後で話しかけるよ）

静かに目を開けた俺は、ガロンの言うとおりに叫んだ。

「煌めけ、光の魂を！」

俺の言葉と共に、俺の手と腰に光が灯った。

そして2つの光は何かを形作っていく。

そして光は収束し、俺の剣と銃に変わった。

「出た……………」

俺はまず、剣を両手で握った。

「キサマ、サツキ、ガロント言ツタナ？」

蛇が長い体をくねらせて俺の元へと近づいてきた。

咄嗟に俺は数歩後ろに下がった。

（この蛇、ガロンのことを知ってくるのか？）

でもガロンは俺の中の存在。ガロンを知っているはずがない。と、俺は心に言い聞かせた。

「ガロンサマをドコニヤツター！！！」

「！！」

蛇は大きな体でジャンプし、鋭い牙をむき出して、俺に向かって突っ込んできた。

俺は剣を体の前に構えたが、大きな蛇の体をとめきることが出来ずに、扉へと吹き飛んだ。俺はそのまま扉を突き破り、町の中に倒れた。

町の住人がこの出来事に驚いてるのか、口々に叫んだりしてる。

「くっ……………」

俺は、右腕全体を地面で擦ってしまつて、その痛みで剣を持つことが出来なかった。

その頃、ベゴンたちは、その戦況をまじまじと見つめていた。

「ピンチね……行くわよ」

「待て、オゴット。ここはレグオズに任せてみよう」

一歩前に出たオゴットの前にベゴンが手を出して、止めた。

「あのままじゃ死ぬわよ？ 思った以上にあの守護獣ガーディアンは強いわ」

「いいから……。？ おい、エイグスはどこに行っただ？」

ベゴンとオゴットがエイグスがいるはずの教会を見渡したが、どこにもいない。そして町も見渡すがどこにもいない。

「あいつ……どこ行きやがったんだ」

「火!？」

俺は火を止める技とか武器は何も持っていない。剣で火は切れな
いし、銃でも火を貫くだけだ。

「あつ……」

その時、俺はあることに気づいた。まだ、この2挺の銃は一度も
使っていないということに……。

「ダメもとでやってみるしか……」

俺は痛みをこらえながら、右手で白いほうの銃を思い切り握り、
炎と蛇に向かって引き金を引いた。

拳銃だから、弾丸が出ると思っていたけど、この武器はそうじゃ
なかった。

拳銃からは、白いレーザーのようなものが銃口から吹き出して、
炎と蛇に向かって放たれた。白いレーザーは炎に触れると瞬時に炎
を吹き消し、蛇の口の中へ直撃した。

「フシャアアアアアアアー!!!!!!」

蛇はその場に倒れ、のた打ち回っている。その声から、痛みがあ
るということが分かった。

「効いた……」

ふと、教会のほうに目を向けると、ベゴンもオゴットも驚いた顔

をしている。俺はそれを見て、ちよつと嬉しかった。俺は皆がそこまで期待していなかったと言うことは分かっていた。だからこそ、それを覆した時が余計に嬉しかった。

「フシユウ……小僧、キサマ何者ダ」

「レグオズ」

「名ナドドウデモイイ。オ前ト一緒ニイタ3人カラ八邪悪ナル者ノ心ガ感じ取レタガ、オ前は更ニ邪悪ナ心が感じ取レタ。一体、キサマハ何者……ダ——」

蛇はその言葉を最後にその場で息絶えた。よく見ると後頭部に穴が開いてる。俺の放ったレーザーは口も貫通してたようだ。

「我らが守護獣に何たる事を……」
さつきエイグスに殴られていた神父がよろめきながら外へ出てきた。

「レグオズ行くぞ、目的は果たしたからな……」

ベゴンはオゴットと一緒に俺に近づきそういつて、町の出口へ向かっていった。

俺は若干神父の事が気になってたけど、その場を離れて、ベゴンたちの後ろについていった。

もう一つ、蛇の言うことも気になっていた。俺が邪悪な心を持つてる。ベゴンやオゴット、エイグスよりも……

（……！？ “鏡”^{テネブラ}のしてることはまさか悪いことなのか？ 俺は記憶がないからわかんないけど、守護獣は本当は神聖な生き物なんじやないのか？

それを虐殺して、礎つてやつを破壊して……。もし

かしたら“鏡”^{テネブラ}は極悪な組織なんじゃ……）

『その通りだ、レグオズ。“鏡”^{テネブラ}は極悪組織だ』

（ガロン！）

俺はその場で足を止めてしまった。

『レグオズ、お前の思うとおり“鏡”^{テネブラ}は極悪非道の組織。かつて私も……』

（俺、どうしたらいいんだ？ あの守護獣は俺は悪いやつって言った。ガロンならその答え知ってるんじゃないのか！？）

『今は話す時ではない。今は“鏡”^{テネブラ}に従え。いつか時が来れば……真相は見える』

（……真相）

「おい！ レグオズ！ 何してんだ行くぞ！」

「！」

ベゴンの声で意識を覚ました俺は、少しうつむきながらベゴンのもとに走っていった。

「まあ、初めてだったから戸惑う気持ちも分かる。ちょっとずつ慣れていけばいいからな」

ベゴンはそう優しく俺に語ってくれた。でも俺はその言葉が信じられなかった。

でもガロンの言うことは信じられる。だから、こいつらが全員悪いやつらだって事も分かっている。でもガロンを信じてるからこそ俺は言うことに従う。

そして俺はこれから……“鏡”^{テネブラ}を信じない。

- 17話？(2) : 意識の変化(後書き)

ちよつと急展開ですね。

レグオズがちよつとずつ組織の極悪さを知っていく。そしてそれに立ち向かっていく。

と言うことで、非常に重要な回になる次回の予告を……

【次回】

突如消えたエイグスの姿。

突如変わるレグオズの心。

突如消えたガロンの声。

突如着いた謎の町。

突如現れた謎の少女。

全てが絡みつく時、謎は解ける。

- 17話 - (3) : 記憶

「なあ、ベゴン。エイグスはどこに行ったんだ？ さっきからいないだろ？」

「それが分からないんだ。でもアイツはいつもあんな感じだから気にすることあねえ」

グレミオを出て、さらに北へ北へと進んでいた俺たちは、エイグスの所在について何も分からなかった。

でも今は任務が優先らしい。

エイグスは一体どこに行ったんだ？

それから数時間歩いていたらようやく次の町が見えてきた。

道はいつの間にか、芝生のような緑ではなく、小砂漠のような感じだった。でも砂嵐が起ったりはしていないから、砂漠の中でも本当に安全な所なんだろう。

「よし、見えてきたぞ。あれがホリドマだ」

ベゴンは町を指差してそういった。

「……なあ、人がいないぞ？」

俺はいち早くその異変に気づいた。

町からは賑やかな雰囲気はもちろん、明かりなどが全くなかった。「不気味ね。依然来た時は賑やかな町だったのに」

オゴットは昔任務でここに来たことがあるらしい。

俺は、でもそれさえ信じられなかった。ガロンが教えてくれた真相。それを思い出すたびにオゴットやベゴンのことが信じられなくなっていく。

「とにかく、どこかの家に入るぞ」

ベゴンは町に入っただけであつた、レンガで出来たような家に入っただけ。

俺もそれに続いて入っていく。

「誰もいない」

この家はもう随分使われていないみたいだ。埃が舞っていて、くもの巣も所々に張ってる。

すると、オゴットが家の中にようやく入ってきた。

「他の家もこんな感じだったわ」

他の家を見てきたようだ。

ガーディアン

「なあ、こんな所に守護獣なんているのか？ 絶対いるわけないよ」

俺は率直にそう思った。こんな潰れかけの町に守り神がいるってことだけで違和感がある。

「とにかく守護獣がいそうなところを探すぞ」

ベゴンは俺の話を軽く流して、この家を出て行った。

「？」

俺はそのベゴンの反応に強い違和感を感じた。前までならそんなことはなかったと思うけど、今は違う。ベゴンも悪いやつだって分かってるからこそ言動に違和感を感じる。

でも今はガロンに従うしかない。徐々に組織の目的を暴いていかないといけない。

俺もベゴン、オゴットに続いて家から出ると、町の奥に向かって歩いていった。

やっぱり人は誰一人としていない。

その時、突然ベゴンが歩くのを止めて俺たちの前に手を出した。

「待て。……何か来るぞ！」

俺たちに緊迫な空気が流れる。俺はゴクリと唾を飲んで周りに注意を払った。

そして、何かがひび割れるような音と一緒に、俺の背後から巨大なムカデの化け物が出てきた。

「！ ムカデ！？」

ガーディアン

「守護獣だ！！！！ よける、レグオズ！」

巨大なムカデは体から生えてる触手を俺に向かって数本伸ばしてきた。

俺はいつの間にか体から消えていた武器をもう一度出す暇もなく、触手に体を叩きつけられた。

「くっ！」

俺はムカデの出現と共に砂場と化した地面に体を打ちつけた。

「ちっ、やるぞオゴット！」

「ええ！」

俺はかすかに意識が残っているみたいで、2人に目を向けた。2人はそれぞれ武器を出す動作をしていた。

するとその時、ムカデのいる方向で大きな爆発音が鳴り響いた。

俺は体をビクつかせて、そこに目を向けた。

「グガガガッガア！！！！」

ムカデは体に大きな穴を開けて、そこから緑の血を噴出し、大きな動作で倒れた。その衝撃で建物が、瓦礫となって崩れている。

「何だ？」

「……誰がいるわよ！」

オゴットがムカデの奥を指差してる。

俺もそこに目を向けた。そこには女の子が1人立っていた。

「あなたたち！　ここで何してるの！？」

その女の子には見た目からの強そうなイメージを持ってたけど、まさにその通りだった。

「それはこっちの台詞だ。お前はなんでこんなところにいる。この町の住人か？」

「はあ？　違うわよ。なんでこんな廃墟に住まなくちゃいけないのよ？」

「そのムカデは守護獣だろ。お前は何か目的なんだ」

「助けてあげたのに何？」

俺を挟んでベゴンと女の子が言い争っている。

何か気まずいといふかなんと言つか……。

「と・に・か・く！ あなたたちには話を聞かせてもらっわ！ でもまずは……………」

女の子はまたムカデに体を向けると、拳をぎゅっと握りムカデに向かつて飛びあがった。

「ダアアアアアッ！！！」

女の子はその拳でムカデの顔を殴り飛ばした。

ムカデの顔は爆発音をあげて無残に飛び散った。

「ふう。完了！」

女の子は凄いたくましかった。ガッツポーズをすると、また俺たち近づいてきた。

「で、この弱い男は誰？ あなたたちも武器も持っていないじゃない！」

「とにかくどこか家に入るぞ……………」

ベゴンはそう言うのと負傷してる俺を肩に乗せて、近くの家に入っていた。

「ニールス・サラ・アルハンゲリスク」

「……………」

ベッドに寝かされた俺、椅子に座ったオゴット、壁にもたれてるベゴン、全員が無言で女の子を見つめた。

「な、何よ。な・ま・え！ あたしの名前！」

「^{なけ}長えな……………」

「長いわ」

「長い」

ベゴン、オゴット、俺がそれぞれ言葉を漏らした。全員同じ感想だった。

「ふん！……ところであなた達のその服装、何かの組織？」

「……いや、ただの趣味だ」

「ふん。……怪しい……」

女の子、いや、ニールス・サラ・アルハンゲリスクさんは顎に手を当てて俺たちを怪しい目で見てる。

一通りニールス・サラ・アルハンゲリスクさんは俺たちの顔を見ると、今度は腕につけてる時計を見た。

「あ！やばっ！」

口を押さえて小さくそう漏らした。

「ごめんだけどもう行かなくちゃ！色んな事情はまた聞くわ。…

…あ！最後に一つ。あたしは“鏡”^{テネブラ}って極悪組織に関して調査してるの。何か分かったら連絡よろしく！」

ニールス・サラ・アルハンゲリスクさんは猛烈な勢いで家を出て行った。

そして俺たちが顔を見合わせる。

「なんで俺たちの組織名を知ってるんだ。誰かが漏らしたのか……」

「とにかく一旦、戻りましょ。グノウに伝えないと」

「そうだな。レグオズも怪我してるしな。——ハッ！」

ベゴンが家に闇の渦を出現させた。ベゴンはベッドから俺を簡単に背負って闇の渦の中に入っていく。

——一方その頃、ニールス・サラ・アルハンゲリスクは猛烈なスピードで小砂漠を駆け抜けていた。

「あいつらの事聞けなかったな……。でもアイツに怒られるよりマシだああ！！！」

サラは今よりさらにスピードを上げて駆け抜けていった。

——グノウの部屋ではベゴンとオゴットが今日のコレまでの出来

事を全て伝えていた。

「そうか。ベゴン、オゴット、先の任務に関しては一時保留だ。まずはそのニールス・サラ・アルハンゲリスクという女の調査を始める。エイグスの行方については他のやつに任せる」

「レグオズは？」

「やつはもう役に立たんだろうな。無視しておけ」

「……暫く任務を与えないと言うことですか？」

オゴットのその問いに対してグノウは、瞬時に一言で返した。

「そうだ」

——レグオズはあの後部屋に戻り、ベッドに横たわっていた。

「もう分からない。何もかも……」

俺は一人でこれまでのことを考えていたら疑問しか思い浮かんでこなかった。

（なあガロン。お前、今は“鏡”に従えて言ったよな？　いつかは裏切れって事か？）

「え？」

ガロンからの反応がない。いつもなら心の中で対話できるのに……

（ガロン？　なあ、ガロン！）

………やつぱり返事がない。よく心を落ち着かせてみると、ガロンが俺から消えたような感覚になった。

「……っ！」

俺は痛む体を堪えながらベッドから起き上がった。

ガロンがいないのなら、武器は出ないはず。武器が出るならただガロンが俺を無視してるってことだ。

「煌めけ、光の魂を………」

反応が何もない。

「ガロン、どうしたんだ」

俺はもう一度ベッドに横になった。そして俺は目を閉じ、イロイロ考えた。

このまま組織にいてもいいのか。

いつそ逃げたほうが楽なんじゃないか。

記憶が戻る気配はないし、“鏡”は悪いやつらって知った。

あのサラって女の子も極悪組織って言っていた。

もうそれは確実だ……。

「どうしたらいいかわからないよ、フィンゲ……。――!!!!?」

俺は今無意識のうちに言葉を漏らした。

フィンゲ。どこかで聞いたような名前だ。

もしかしたら本当は記憶が戻りつつあるのかもしれない。過去の記憶が……

- 17話? (3) : 記憶(後書き)

さあ、ここから一気にショートカットに入るかもしれませんよwww
今、- 17話ですから一気に進む可能性があります。

個人的に一番好きなキャラが出来ました！
サラです！

名前を覚えるのは大変ですねwww

- 3話：覚醒し戻った声 -

あれから2週間が経った。

謎の少女ニールス・サラ・アルハンゲリスクと出会い、任務が中断してからちょうど2週間。

俺には何も任務が与えられていなかった。

部屋には誰も入ってこなかったし、俺が部屋を出ることもなかった。あつたとすれば食事の時だけだ。

ここでの食事は時間になれば自分の部屋の前に用意してくれている。誰がやってるのは知らないけど、片付けもその誰かがやるから楽だ。

俺は2週間前からずっと悩み続けていた。突然俺の口から出てきた“フイング”という単語。それが人の名前か物の名前か地名かは分からない。

でもどこかで聞いたような、何か懐かしい感じた。

あれから俺の中でモヤモヤが消えない。

それに、ガロンも俺の中から突然消えた。

あれから毎日のように話しかけてたけれど、たったの1回も返事は無かった。

「どうしたらいいんだよ、ホント……」

俺はもう本当にそんな気持ちだった。というよりは、そんな気持ちしか今は出てこない。

今日もこれからずっと悩み続けて気がついたら寝てて、次の日になる。って感じなのかな……。

俺は目を瞑った。

もう何も考えないでいよう。ただ悩んでいても解決はしない。

今は、俺がこれからどう行動すればいいのかを冷静に考えるのが先決だ。

でも――

「あー、もう分かんないよ！――！！」

「なあにが分かんないんだ？」

「！」

俺は声のした右方向にすばやく顔を向けた。

「べ、ベゴン！」

「よあ」

ベゴンが久しぶりって感じで手を上げた。

2週間ぶりだ、ベゴンにあうのは。

「何だよ、何か用か？」

「んー、まあ用があると言えばあるな。……………レグオズ、お前この2週間何してた」

「何って……ずっと寝てた」

悩んでたなんて余計なこと言っちゃいけない。ベゴンも極悪組織の一員なんだ。まあ、俺もそうなんだけどな。でも俺の心理が分かるようなことは漏らさないでおこう。ってこの2週間で決めていたんだ。

「暇なやつだな……。っとそれより、グノウが呼んでるぜ！ 何か大事な話らしいぞ？」

俺の心臓がバウバクし始めた。

怒られるのか、新しい任務を与えられるのか。もしかしたら戦えない俺のことを全部わかってて殺すつもりなのかもな。

俺はそんな事を心のうちに秘めながら、グノウの部屋へと向かった。

「失礼します」

俺が部屋に入るとグノウがいつもどおり椅子に座っていた。

「レグオズ、武器を出してみる……」

「え？」

出来るわけが無い。今の俺には力の核であるガロンがないんだ。武器を出せるはずが無い。

「どうした」

でも今はダメもとでやってみるしかない。

「煌めけ、光の魂を……」

やっぱりダメだ。出ない。

「なぜ武器が出ないのだ、レグオズ」

「あの任務の時から反応が無いんだ」

俺はついに本当のことを話してしまった。グノウには全てを見透かされているような気がして、うそがつかない。

「レグオズ。我々“鏡”^{テネブラ}の目的を知っているか？」

「礎つてやつを破壊して、守護獣も殲滅させる」

礎はその世界のもっとも大事な部分におかれているでかい玉らしい。俺はまだ見たことが無いけれど……。今、“鏡”は現時点で約40の世界の礎を破壊してきたらしい。

懐かしいな。この記憶は俺が機関に入って1日目の任務でチェイグティが教えてくれたことだ。

「それは、目的ではない。目的を達成するのに必要なものだ」

そんな事いわれても俺は目的なんて聞かされていないから、答えられない。

俺は下を向いて黙った。

「まあいい。その守護獣を殲滅するには何が必要だ？」

「力。武器……」

「今のお前は……」

「武器がない」

「つまり、お前はもうこの組織にいても意味が無いと言うことだ」

「……」

もつともな意見だ。力の無いやつなんて必要ない。グノウはそんなやつだ。

「決めるレグオズ。今ココで死ぬか、組織を抜け1人で生きていくか……」

「分からないな。グノウ、あんたは何で俺を拾ったんだ！ 必要ないならあの時から捨てていれば良かったんじゃないのか？」

俺は内に秘めていた思いをぶちまけた。

「あの時は、お前に何か特別なものを感じた。だがそれは私の勘違いだったようだ……」

「前まで俺はあんたに感謝していた。多分俺はあんたに会ってなかったら死んでたし……。でも今は違う！ 俺は少しずつ記憶が戻ってる！ このまま何も思い出さずに死ぬわけにはいかない！」

そうだ。それが俺の今するべきこと。記憶を取り戻し真実を知る。フィングとは何なのか。化け物を斬った時に脳裏をよぎった、謎の映像。そして……俺の正体を……。

そのためには死んだらいけないんだ。

「記憶が戻ってきている……か。それが本当かは知らないが私には関係の無いこと。お前の過去など知ったところで何のためにもならない」

「グノウ……。グノウ！……！！！」

怒りが俺の頭で爆発した。グノウは許せない。その言動が頭にくる。

その時俺の中で何かが蘇った。

（ガロン？）

『ようやく気づいてくれたかレグオズ。私はずっとお前の問いに答えていた。だがそれに対してお前の返事は無かった……。それは恐らくお前が色々思いつめていて、それが私の存在を押し潰しかけていたんだろう。だが、今お前は怒りで全てを解放させたことによつて私も蘇った』

久しぶりに聞いたガロンの声は懐かしくて、涙が出そうだった。

俺の良き理解者……。俺の唯一の大切な仲間だ。

（ガロン、俺に力を貸してくれ！！！！）

『ああ』

「煌めけ、光の魂を！！！」

俺から今までで最大の光が漏れ出した。腕、腰だけだった前までの光とは違う。今の光は俺の体を全て包み込んでいる。

この光は俺にとってもない力をくれてる感じがする。何か暖かい光……。

光は徐々に収束していき、俺の剣と銃2挺に変わった。

光は武器に変わってもまだ俺の体に纏ったままだ。大きすぎて収束し切れなかったんだろうか。

でもそれも俺の力として、俺を強くしてくれてる。

「グノウ……………勝負だ！！！！！！！」

俺は剣の切先きっさきをを勢いよく、グノウに向けた。

「いいだろうレグオズ……………。力の差を思い知らせてくれるわ！！！！！！！」

椅子から立ち上がったグノウの体から黒い禍々しい闇の風が部屋全体に放たれた。

俺を含め、全ての家具が吹き飛ぶ。壁にも少しヒビが入ってる。

「くっ……………」

でも今の俺は光に守られているから大丈夫だ。俺は黒い闇の風に何とか耐えることが出来た。

———ここから光と闇の壮絶なる戦いが幕を開ける。
レグオズグノウ

- 3話：覚醒〜戻った声〜（後書き）

序章でもある「ー」話」が終わりを迎えています！

次回は見て分かるとおり、レグオズVSグノウ。題名もコレになるのではないのでしょうか？

序章が終わったら、登場キャラ紹介とかの番外編を行いますのでよろしく願います。

- 3話(2) : 虚無の光線(前書き)

今回はバトルということで、3人称です。

- 3話(2) : 虚無の光線

レグオズはまず剣を手に取った。

前の蛇の守護獣・ヴリトラと戦った時は剣の扱い方とかが未熟だったが、今のレグオズは違う。

レグオズは自分を纏っている光に対して戦いのノウハウは全て叩き込んでくれている感じがしていた。

「行くぞ！」

レグオズは両手で剣を握りしめ、グノウに斬りかかった。

でももちろんレグオズはこれで簡単にグノウを斬れるとは思ってなかった。

その予想通り、グノウは振り下ろされた剣筋を読みきつて、軽々とかわしレグオズの横に立った。

「甘い。いきなり近距離系の武器で来るとは……」

避けられることは分かっていたレグオズはすぐさま剣を横に振るった。

「何度斬ろうが同じことだ」

グノウは今度はジャンプして避けた。グノウの顔は余裕に満ち溢れている。

「どうかな！」

レグオズは剣を宙に軽く放り投げて腰にある銃に手を取った。

そして右手で白い銃を握り、一気にトリガーを引いた。

銃口から放出された白いレーザーは宙に留まったままのグノウに向かって勢いよく進んでいった。

「空中なら身動き取れないだろ」

「だから甘いといっているのだ」

「？」

そういつとグノウは右手を体の前に突き出して、レーザーをそのまま受け止めた。レーザーは暫くグノウと競り合っていたが、グノウが手に何か力を入れるとレーザーは簡単に弾け散った。

「くそっ……」

レグオズは左手で宙にある剣を掴み、背中に差した。

グノウはふわりと地面に降り立つと鋭い目つきでレグオズをにらみつけた。

「！」

その目にレグオズはただならない恐怖を感じた。
今まで感じたことのない悪を。

「レグオズ、お前にその武器は使いこなせない……」

グノウはまるでレグオズの事を全て見透かしているかのようにそう言った。

「……」

それに対してレグオズはただ黙ることしか出来なかった。

「次は私から行くぞ」

グノウは右手を軽く上げると、その場から瞬時に消え去った。

「！！！！」

高速移動というレベルではない。瞬間移動もしくは時空間移動か。レグオズはただならぬ気配を背後に感じ、すぐさま間合いを取って後ろに体を向けた。

「？ いない……」

だがそこには誰もいなかった。

しかしレグオズがグノウの気配を背後に感じたのは間違いなかった。

「こっちだ」

今度も突然レグオズの後ろで声がした。さっきと同じようにレグオズは後ろを振り向いた。

「？ ということだ……」

またグノウはいなかった。

レグオズはこの症状を幻聴ではないのかと一瞬思ったが、それはすぐにレグオズの頭の中でかき消された。

「違う。絶対にいたはずだ。どこだ？——！」

その時、鋭い何かがレグオズの腹を貫いた。

「……え……」

レグオズはゆっくりと自分の腹に目を向けた。

そこには血にまみれた鋭い刀がレグオズの腹を貫いていた。

「反応が遅いのだ」

レグオズは恐る恐るゆっくりと後ろに目を向ける。

そこには——

「グノウ」

不敵な笑みを浮かべたグノウがいた。

グノウはレグオズの腹から刀を抜き取ると血を振り払った。

その刀は見るからに暗黒の雰囲気をかもし出していた。真つ黒な

刀身に、黒い羽のような鍰、柄も全て黒く染まっている。

レグオズはその場に膝を着き、そのまま力尽きるように倒れた。

「はあ、はあ。それが……グノウ……の武器……か？」

「そうだ。この刀の名は“アンチデーゼ無黒墮天使”。全てを無に返す悪魔の力だ」

「無に……返す」

「無に……返す」

レグオズは徐々に頭の意識が薄れてきた。だが、これくらいのダメージでここまで意識がなくなるなんて事は普通に考えてありえない。

「そうだ。この刀で刺されたものは、意識を失いその場に倒れこむ。そして私に止めを刺される。……残念だったなレグオズ。お前の負けだ」

レグオズにはかすかにまだ意識はある。薄れる意識の中、レグオズは必死にもがいていた。

が、しかし——

ドシュッ！

再びレグオズをグノウの刀が貫いた。

（くそつ。何で無理なんだよ……。やっぱグノウに勝つのは無理なのかな）

レグオズはそう思い残し、静かに目を閉じた。

『レグオズ寝るな。まだお前は負けていない。起きるんだ！』
ガロンが完全に意識を失いかけたレグオズを引き止めた。

「！……ありがとう、ガロン。おかげで目が覚めたよ」

レグオズは床に手をつきながら、ゆっくりと起き上がった。

「なぜだ……。なぜ起き上がれる」

グノウは。確実に止めを刺したはずのレグオズが起き上がってくる事が信じられず、目を丸く大きくした。

グノウがこのような表情をするのは非常に珍しいことだ。

「ガロンが……。俺を起こしてくれた」

「ガロン？ 誰だそれは」

「あんたにもいるんだろ？ 心の中の存在が……」

「？ 何を言っている」

「！」

（グノウにはガロンみたいな存在がいらないのか？グノウが嘘をつくとは思えないし、そんな顔でもない）

レグオズはそう思った。

「とにかく、その刀じゃ俺の意識は奪えない！」

とはいっても今のレグオズは大きな負傷をしてる状態。腹を2回も刺されてる。あと1回刺されたら終わりだろう。

更に、傷が広がるという理由で大きな動きは出来ないため剣は使えない。だから銃を使うしかない。しかもレグオズにはまだ使ったことのない黒い銃がある。

まだまだ勝算はある。

見た目からして強そうな武器だ。

もっと早くにつかっっておけば良かったが、レグオズには不安があった。

それがどのような不安かはレグオズにもよく分かっていなかった。

「はぁ、はぁ。続けるぞ、グノウ」

レグオズは軽く息を切らしながら、黒い銃を右手に、白い銃を左手に取った。

「そのまま死んでればいいものの……」

グノウは再び刀を構えた。

「喰らえ!!!」

レグオズは期待と不安を吹き飛ばすように、右手の黒い銃のトリガーを引いた。

「……ん？」

だが思い切り思いを込めた黒い銃からは、白い銃のレーザーどころか、何も出なかった。

「ふっ、万策尽きたな。さよならだ……レグオズ」

グノウが刀を振り上げる。

レグオズは両手を顔の前に構え、目を思い切り瞑った。

「——！　グハッア!!!!」

「……!?!」

突然グノウが声を上げ、その場にひざまずく。

グノウは刀を床に落とし、腹を右手で押さえている。

「何をした……レグオズ」

「え……」

レグオズは構えていた両手をゆっくりと

レグオズはこの現象を全く理解できていなかった。さっき心の中で諦めかけたその時、グノウが突然その場に跪いた。

（これが黒い銃の能力なのか?!）

『そうだ』

ガロンがレグオズの心に答えた。

『その黒い銃から発せられるのは、目に見えぬ弾丸。だが弾丸が当たっただけではダメージは与えられない。その発動条件は……大きな動きをすることだ』

つまり、目に見えぬ弾丸を喰らった者が、何か大きな動きをすることによって技が発動する。グノウは完全に油断し、刀を振り上げた。その動作が命取りだったのだ。

「凄いな……」

レグオズは只そう口から漏らした。これが率直な感想なのだ。

「くっ……油断した。だがそれでもお前は私には勝てん」

その余裕はどこから来るのか。とレグオズは思った。

グノウは、ゆっくりと手を床に付きながら立ち上がった。口からはかすかに血が出ている。

「確かにレグオズ……お前には強い力がある。素晴らしい力だ。だがそれすらも私の前では塵同然なのだ」

「根拠はあるのか？」

レグオズの意見はもつともだ。

グノウの言葉にはさつきから根拠が無い。

「それを今から証明しよう……」

そう言ったグノウは床に落ちた刀を拾い、瞬時にレグオズに斬りかかった。

「！」

レグオズは横に跳んで何とかかわした。

だがその時の衝撃で、グノウに貫かれた2つの傷が疼く。

「つつ……」

グノウは冷徹な表情で再びレグオズに斬りかかる。

「！」

黒い刃がレグオズを襲い掛かる。

キンッ！

レグオズは何とか2挺の銃でその刃を受け止めた。だが上から体重を載せているグノウの方が有利なのは歴然だった。徐々にレグオズは体制を崩していき、白い銃にはヒビが入り始めている。

レグオズは何とか身をよじってグノウから離れ、銃を2挺とも腰に戻した。それに伴って今度は背中中の剣に手を取る。

（もう傷が痛むなんて言ってられない！）

猛攻をしかけてくるグノウにいくら銃を持っているからといって簡単に攻撃には移れない。それに銃だと防御力も低く、攻撃の衝撃を受けきることは出来ない。

それならば多少のリスクを負ってでも剣を使った方がいいとレグオズは考えたのだ。

レグオズは両手でしっかりと剣を握り締め、グノウに斬りかかった。

グノウは剣の動きを完全に読みきり、その場から瞬時にレグオズの背後に移動し、レグオズの背中を斬りつけた。

「うっ！」

レグオズの背中から血が流れ落ちる。

ふらつく体に、剣を地面に刺して何とか耐えたが、グノウの攻撃は終わらなかった。

グノウは剣に手乗せて耐えているレグオズを、躊躇無く大きな足で蹴り飛ばした。

レグオズは床に体を打ちつけながら壁に激突した。

「……分かっただろう。私の言葉の意味が……」

「はあはあ……。分かんないな！」

レグオズは腰の白い銃に手を取り、グノウに狙いを定めトリガー

を引いた。

白い銃から放たれたレーザーはグノウの向かっていったが、グノウは軽々とジャンプしてそれを避けた。

「くそつ。――！」

その時、ピキツと音を立てて白い銃の亀裂が広がった。

レグオズの脳裏には、さっきの出来事が頭に浮かぶ。

（あの時の……！！）

レグオズの言うあの時とは、グノウが自分に上から斬りかかって来た時の事だ。

「これ以上撃つたら壊れる……。くそつ」

レグオズは白い銃を腰に差しなおした。それ同時に今度は、やつと能力が分かった黒い銃に手を取った。

グノウはレグオズをじつと鋭い目つきで睨みつけている。

「喰らえ！」

レグオズは黒い銃のトリガーを引いた。さっきと同じように弾丸は目に見えない。

グノウは何食わぬ顔でその場から高くジャンプした。大きな動作をしたのにグノウにはダメージが見られない。

外れたのだ。

レグオズの見えない弾丸は、グノウに当たらず、外れたのだ。

「う、浮いてる……」

グノウは空中に身をささげるかのように浮かんでいる。

レグオズはそれに完全に心を惑わしている。

「レグオズ、もういいだろう。………」
ヌツラ・ダルド『虚無の光線』

グノウは刀の切っ先を壁にもたれているレグオズに向け、暗黒のパワーを込めた。

刀の切っ先に巨大な黒い丸い玉が現れた。

これがグノウの力。“無”の力なのだ。

黒い玉は周りのエネルギーを収束するかのようにどんどん大きく

なっていく。

そして、半径30cmほどの球に完成した。

「でかい……。避けないと」

レグオズは体を引きずりながら移動しようとするが、体が震えてうまく動かすことが出来ない。

「無へ帰れ……」

グノウは冷たい鬼のような顔でレグオズを睨みつけながら、レグオズに向けてその玉を放った。

その玉はゆっくりとレグオズに向かっていく。

「うつ……」

レグオズは黒い玉に向けて黒い銃から見えない弾丸を放った。

だが、黒い玉の動きは緩やか過ぎるため大きな動きにはならず、とめる事が出来ない。

（もう避けるしかない……）

レグオズにはもうそれしかすることはできなかった。だがそれすらもダメージのせいでもとにすることが出来ない。

そして——レグオズは完全に諦めた。

静かに目を閉じ壁に背を寄せた。

『何をしてるんだ……レグオズ！ 逃げろ！』

ガロンの言葉ももうあまり聞こえない。

レグオズが心を閉ざせばガロンはいなくなってしまう。

それにいつのまにかレグオズを包んでいた光も完全に消え去っている。

「記憶……結局取り戻せなかったな」

黒い球はレグオズに徐々に近づいていく。

そして——

ドオオオオオオオオオオオオオオオオ………

黒い球はレグオズの全てを包み込むように静かに爆発した。

・3話(3)：それぞれの思惑

激しく爆発した黒い球は、レグオズの姿を完全に煙で覆いつくした。部屋の影は完全に崩壊し、床も今にも崩れそうなくらいヒビが入っている。

もちろんこの爆発はこの建物中に響き渡っていた。
組織員は全員この異変に気づき、その元へと向かっていった。

「……！ グノウ！ 何したんだ！」

一番早く早くたどり着いたのは、第7の機関員ベゴンだった。
ベゴンはそうとう走ってきたらしく、息を切らしている。

「ベゴンか……」

グノウは床に立ち、刀もいつの間にか消えている。

「……酷えな」

ベゴンが砕け散った部屋を見てそう漏らした。

「？」

ベゴンがふとグノウの足元を見るとそこには、見覚えのある剣が落ちていた。

「その剣……。！ まさかグノウ……」

ベゴンの記憶は正しかった。

落ちていた剣がレグオズのものだということはすぐに分かった。
た。

「レグオズは私に刃向かい散った。それだけだ」

「……。でもまだ武器が消滅してない」

そう。もしレグオズがもし死んでいれば武器は消滅しているはず。
だがレグオズの剣はちゃんと残っている。

ベゴンはレグオズがいるであろう、一番被害の酷い壁際に向かうとした。

「助けるのか」

グノウはその言葉でベゴンの動きを止める。

「あんただって分かってんだろ？ レグオズは“プロジェクト計画”に必要な存在だ！」

「だが刃向かった……。このまま組織にいても力にはならないだろう」

ベゴンのいう“プロジェクト計画”とは、身分の低い組織員には決して知らされることの無い暗黙の計画。

その全貌は完全な闇に包まれている。

その時遅れてようやく、オゴット・ティーゴストがやってきた。

「この状況、どういうこと？」

「やれやれ。無残ですね……。リーダー、あなたがやったんですか？」

オゴットがこの惨劇に目を丸くした。ティーゴストはグノウの仕業だと直感し、グノウの元へと歩み寄っていく。

「ベゴン、助けるなら助ける。その後の事はお前に任せる……」

グノウは寄ってくるティーゴストを完全に無視し、ベゴンにそう一言残し、闇の渦でこの場から去っていった。

「……ベゴン、どういうことか説明してもらおうわよ」

「分かっている。だがまずはレグオズの安全確保だ」

「レグオズ？ ……！」

オゴットもレグオズの剣にふと目を向けただけで、この惨劇の内容を理解した。

ベゴンとオゴットは急いで崩壊した壁へと走っていく。

一方ティーゴストはそんな2人とは共に行動せず、1人レグオズの剣の元へと近づいた。

そして軽々とその剣を持ち上げ隅々まで見渡した。

「これがレグオズの武器ですか……。フッフ、少し興味がありますね」

この剣のどこに注目したのかは定かではないが、何かをたくらんでいるのは確かだ。

「おい、どうなってやがるんだ」

ティーゴストの元に現れたのは、第5の組織員ニグゲクだ。黒い髪を後ろ一本でまとめ、その表情は非常に不気味だ。

「ニグゲクですか……。まあ、また後で話しますよ。それより面白い話があります。気になりますか？」

と、ティーゴストは手に持ったレグオズの剣をニグゲクに見せる。
「……。ふん、なるほど。いいだろう」

ニグゲクも相当頭がきれるようだ。ティーゴストのその一つの行動だけで全ての内容を読み取った。

ティーゴストは闇の渦を出すと、2人ともそこへ入っていった。

「レグオズ！ くそ……。埋もれてるか……」

ベゴンは崩れた壁に寄ると、そこには体の半分が瓦礫に埋もれてしまっているレグオズの姿があった。

「早く助けないと、危ないわね」

「ああ。——ハッ！」

ベゴンはレグオズの半身を覆い隠している瓦礫を持ち上げ、別の場所に放り投げていく。

見た目はかなり重そうな瓦礫の山だが、ベゴンは簡単に持ち上げている。

それから暫くベゴンは瓦礫の撤去作業を繰り返していた。

そしてようやく全ての瓦礫をレグオズからどかすことが出来た。

「ふう。俺はコイツを部屋に運ぶ。オゴットは他のやつらにこのことを伝えといてくれ」

「分かったわ。で、どうするの？　グノウに世話係を任せられちゃったわね」

「……とにかく怪我が治ってから考える」

ベゴンはそういうと闇の渦を出し、肩にレグオズを乗せ、渦の中へと消えていった。

「ちょっと調べてみる必要があるわね」

オゴットはこの出来事に何か違和感を感じていた。

レグオズとグノウの犯した行動に……。

そして、神妙な顔つきのまま闇の渦へと消えていった。

誰もいなくなった崩れ去ったグノウの部屋に、2人の組織員がゆつくりと足音を立てながら入ってくる。

「ククク。ドグエ、グノウさんが怒ったみたいだな……」

「ム……」

始めに話した奇妙な笑い声の男は第3の組織員エグトルだ。緑色のロングヘアーで、とても冷たい表情をしている。何より背が高い。後に話したのが無口な大男の第2の組織員ドグエだ。茶色の短髪で、顔もがっちりとしていてまさに武士と言う感じだ。背も高い。

2人が並んでいると、その光景はまさに山脈のようだ。

「それより聞いたか？　新メンバーが入るってよ」

「ウム……グノウ様に直接お聞きした」

「はっ、相変わらずお堅い人だ！」

「ム……」

2人はこれで凄い名コンビなのだ。幾多の厳しい任務を2人で乗り越えてきた実績がある。

「ま、グノウさんもピリピリしてるってわけだ。上級守護獣の捕獲に向かったロウクゴットとチェイグティが戻ってこない。1匹は捕まえてるが、苦勞してるなあ。ククク……」

「ム……。そろそろ戻ろう。我々にも任務がある」

「はいはい」

2人は闇の渦を使わずに、また同じように静かに去っていった。

そのころベゴンはレグオズの部屋でレグオズをベッドに寝かしている途中だった。

「ふう。疲れたな……。レグオズ、何でグノウに刃向かうんだ。アイツには死んでも勝てないぞ……」

ベゴンはレグオズが何とか命をとりとめたことに安堵の息を吐いた。そしてそれと同時に無謀にもグノウに挑んだレグオズに呆れていた。

「……？ 武器が無い」

ベゴンはレグオズの体を見回したが、レグオズの武器はどこにも無かった。

（剣はあそこに落ちてたよな。銃はどこにいったんだ？ もし破壊してたらレグオズはこんな怪我ですんでないはずだ）

武器とは心の力。武器が破壊すればそのものの心が砕け、外傷も酷くなるものなのだ。

「とにかく、こいつが入ってから何かと問題がおきてる……。いろいろ調べてみるかな」

ベゴンはそう呟くと、腰に1回手を当ててため息をついた。とても疲れているのだろう。

そして部屋からゆっくりと出て行った。

その頃、宇宙最大の世界タイラントのゴールドシルンの広い一室では、1人の王様のような男とサラが話をしていた。

「サラ。『鏡』^{テネブラ}について何か情報は？」

「組織のアジトを突き止めた」

「！！！！」

王様であろう男が目を丸くする。

「これだけ探しても見つからないワケが分かったわ……。組織のアジトは、時空の裏側にあるわ」

「！なるほどな。詳しく聞かせてくれ、サラ。すぐにスパイを向かわせる」

王である男とサラは再び会話を暫く続けた。

序章　完

・3話(3)：それぞれの思惑(後書き)

序章が終了しました！

まだまだまだまだ話は続いていきますが、やっと一段落です。

これは一応過去の話ということなんで、一人称が多かったですが、これからは3人称になります！

これからもレグオズを応援してやってくださいww

第1章 第1話：脱退（前書き）

第1章の始まりです！

レグオズ視点で書いてきましたが、これからは3人称で書いていきます。

これまではレグオズの回想ということでは……。

第1章 第1話：脱退

グノウに負けてから一週間後、ようやくレグオズは静かに目を覚ました。

「ん……。ここは、俺の……部屋？」

レグオズはまだ今の状況がつかめていなかった。
それもそうだ。

意識を失ったままずっと眠っていたのだ。頭が働かないのは当たり前のことだ。

「そうだ……俺グノウに負けたんだ」

レグオズは体に巻かれた包帯を見てそのことを思い出した。

「でも、これ誰が……」

レグオズはあの時確実に死んだと思っていた。

だが今、自分は治療されて、ちゃんと生きている。

誰かが助けてくれたんだろう。と、レグオズは心で呟いた。

レグオズはやはり落ち込んだままだった。

グノウに負けた事よりも、自分の無力さに心を沈ませた。

（これからどうしようかな）

その時、静かに音を立ててドアが開いた。

「！」

レグオズがドアに顔を向ける。

するとそこには、手に小さな紙切れを持ったベゴンが立っていた。

「あ……」

「おお！ 起きたのか！ ちょうど良かった。今すぐ大広間に行くぞ」

ベゴンは指令書をレグオズの部屋に持ってきたところだった。

「え……あ、ああ」

レグオズはゆっくりと体をベッドから起こし、まだ少し痛む体を動かしベゴンに近寄った。

「よし、行くぞ」

——部屋を出た2人は大広間に向かって歩いていった。

「大丈夫か？」

「うん……」

ベゴンはレグオズの体の具合を気にしながら、レグオズの歩く早さにあわせている。

「今日新メンバーが来るんだとよ。どんな奴だろうなあ？」

「新メンバー……」

レグオズは心の中で、自分がもう用済みだから新メンバーを入れたんだろうか。と考えていた。

「よし、着いた」

ベゴンは大広間の扉を勢いよく開いた。

そこにはいつもどおり組織員が椅子に座っていた。

行方不明だったロウクゴット、チェイグテイ、エイグスの姿もある。

扉の音に反応した組織員たちがベゴンたちを見つめている。

グノウは鋭い視線でレグオズをじっと見つめている。

「座るぞ」

ベゴンはレグオズにそういつて自分の席に着いた。

レグオズも一旦周りを見渡すと、自分の席へと移動した。

「今日、新メンバーが“鏡”テネブラに加入する」

グノウがそう言くと、ゆっくりと扉が開き始めた。

そして外から新しいメンバーである男が入ってくる。

「！」

メンバー全員がその男の風貌に驚きを隠せなかった。

「第12の組織員としてお前達と仲間になることになった、ゴートンスだ」

組織員達が驚いたのは、その年齢だった。

ゴートンスという男は、すでに年老いていた。体型はガッチリしていて、顔にも迫力がある。白く太い髭を鼻の下に生やし、左目は戦闘で負ったであろう傷跡が付いている。

「じいじじゃねえか」

ロウクゴットが、ついそう漏らしてしまった。

それにゴートンスが鋭い目つきで睨み返す。

「そしてこれからの任務は2人1組で行動してもらう」

グノウはそういうと、机の下から大きな紙を取り出した。その紙には誰と誰がペアを組むかが書かれていた。

エグトル&ドグエ

ロウクゴット&チエイグティ

ティーゴスト&ニグゲク

オゴット&ベゴン

エイグス&ゴートンス

「以上、解散だ……」

グノウは椅子から立ち上がり扉に向かい歩いていく。

「……グノウ！ 俺の名前が無いぞ？」

レグオズが勢いよく椅子から立ち上がりグノウを呼び止めた。その時の衝撃で椅子が後ろに倒れてしまっている。

「お前はもはや役に立たない人形だ。どこにでも行け……。――期待しているぞ、ゴートンス」

レグオズに強くそう言い放つと、ゴートンスとのすれ違い際にそういい残し大広間から出て行った。

レグオズは顔を下にうつむける。

「レグオズ……」

ベゴンが心配そうな顔でレグオズを見つめている。

レグオズは倒れた椅子を直すと、そのまま大広間を出ようとし、扉へ向かった。

「ワシが憎いか？」

ゴートENSはレグオズとのすれ違い際にそう言い放つ。

レグオズは足を止め、ゴートENSの顔を見る。

「ワシが入ったことでお前の格が成り下がったのは必然。そんなワシが憎いか？」

ゴートENSは別にレグオズを茶化しているわけではなかった。もちろん心配して声をかけたわけでもなかった。ただ、レグオズに興味があつた。それだけなのだ。

「そんなのどうでもいいんだ。俺はもう組織を抜ける。だから……この服も、もういらないんだ」

と、レグオズはゴートENSの言葉を否定すると、着ていた組織服を脱ぎ捨てた。服を脱ぎ捨てたレグオズは、ここに初めてきた時の元の服になった。

そしてレグオズは大広間から出て行き、闇の渦が大量にあった場所・トリップ場に向かった。

レグオズのいなくなった大広間では残りの組織員たちが何やら会話を始めていた。

「レグオズが“鏡”に入ってきてからというものの何かと事件が多かったなあ」

エイグスがそう呟いた。

「ククク、確かに……俺は直接話したことは無いがアイツからは、嫌なオーラを感じるからな」

エグトルがそれに同意し、奇妙に笑う。

「これで良かったのかもしれないわね」

オゴットも同意し、静かに目を瞑った。

「でもアイツどこにいくんだ？ 行く場所なんてあるのかよ？」

ロウクゴットが机に肘を突きながらそう言った。

「トリップ場に行くだろな……。前の任務であそこを使ったからな」
ベゴンはそう分析すると、突然席から立ち上がり、大広間から出て行った。

「……やれやれですね。ベゴンはどうもレグオズのことが気になるようです」

ティーゴストはベゴンの不可解な行動に呆れ、頭を抑えている。

「ところでチェイグティ、上級守護獣は見つかったのか？」

ニグゲクがこれまで行方不明だったチェイグティに話を振った。

「お前には関係ない」

「ちっ、冷てえ野郎だな……」

ニグゲクは眉間にしわを寄せて軽く舌打ちをした。

そんなニグゲクにチェイグティは横目でギロリと睨みつける。

少し場の空気が悪くなり始めたところで、ロウクゴットが話を切り出す。

「ま、別に気にすることねえだろ。組織を従うも抜けるも個人の自由ってもんだろ」

ロウクゴットはポケットに手を入れたまま椅子から立ち上がり、大広間を出て行った。

それと同時にチェイグティも大広間から出て行く。

また上級守護獣の捕獲任務に向かうのだろう

「待てよ、レグオズ！」

トリップ上に向かう途中で、ベゴンが息を切らしながらレグオズのところまで追いついてきていた。

「ベゴン……」

レグオズは振り返ると静かにそう呟いた。

「組織を抜けるのか？ 行く場所はあるのか？」

「ない。でももうここにいる理由も無くなった……。だからこれからは自分で旅して記憶を取り戻す」

レグオズの目は決意の光に満ち溢れている。誰がどう言おうこの決意は変わらないだろう。

「俺たちを敵に回したら死ぬぞ……。恐らくグノウはお前を殺しに来る」

「構わないさ……。人はいつか死ぬんだから……」

「そこまでして抜きたいのか。なら俺は止めねえ。これから俺とお前は……敵同士だ！」

レグオズにとってベゴンは仲良くしてくれた唯一の存在。ベゴンもこの言葉を発するのに、どれだけ勇気を使ったのか分からないくらい、ベゴンにとっても大事な存在なのだ。

「……」

レグオズはベゴンから顔を背けると、トリップ場に向けて高くジャンプした。

「ふっ……」

消え去ったレグオズの姿を見て、ベゴンはニヤリと口角を上げた。笑っているのか、呆れて笑ってしまっているのか。答えはもちろん……前者だ。

トリップ場から適当に闇の渦へ入ったレグオズは、新たな世界に來ていた。

「ベゴンの言うとおりだな……。いざ外に出てみると行く場所が無いな」

レグオズは広大な世界を見渡した。

この世界の名はハギト。宇宙最大の金持ちの国で、住人全員がリッチな生活を送っている。宿屋で一泊するにも、普通の10倍以上の金がかかるが、住人は簡単に支払うという国だ。

「とにかく町に行ってみよう」

レグオズが適当に方向を決めて進み始めたその時、遙か前方から猛烈な勢いで何かが突進してくる。

「え？ 何だ？」

その何かはぐんぐんスピードを上げて、

「うわっ！」

レグオズと正面衝突した。

「いてててて……。あれ？ 君は……」

衝突してきたのは、サラだった。

サラはレグオズの顔を見て、あのときのやつだと思い出した。

「つつ……。お前……。あの時の」

それはレグオズも同じだった。

「ちょうど良かった。あなたを連行するわ！」

「……え？」

第1章 第1話：脱退（後書き）

読んでくれてありがとうございます！

ちよつとネタに詰まりつつあるんですけど、何とか頑張っていきま
す！

個人的にはサラは好きなキャラなので、どんどん出していく予定で
すが……

ではこれからもよろしく願いいたします！

第1章 第2話：強襲の追っ手

「れ、連行？」

レグオズはサラの顔を丸い目で見つめている。

「君、^{デネブラ}“鏡”の一員だよ。服は前と違うみたいだけど……」

サラは落ちた赤い眼鏡を拾い、服に付いた砂を振り払いながら立ち上がった。

「でも俺はもう^{デネブラ}“鏡”は抜けたんだ！俺にはもう関係ないんだ」

レグオズも服を払いながら立ち上がり、サラに背を向けた。

「つまり君はもう^{デネブラ}“鏡”の敵ってワケだ。なら別に情報をくれてもいいんじゃないの？」

レグオズは痛いところを付くサラに何も返せなかった。サラの言っていることは最もだ。

「分かったよ……。でも、どこに行けばいいんだ？」

これはもしかすると、どこかに住み着くチャンスかもしれないと思ったレグオズは、素直にサラに従うことにした。

「ゴールドシルンってとこ。宇宙列車に乗らないといけないけど……君はここに何で来たの？」

「闇の渦で来た」

「やみの……うず？」

「知らないのか？」

そもそも闇の渦は^{デネブラ}“鏡”専用の移動術だ。外部者のサラが知るはずが無い。

「知らないよ。じゃあやって見せてよ。タイラントの場所は分かってるんでしょ？」

「タイラントって……」

「前、わたし達があつた場所！」

その言葉でタイラントの場所は思い出したが、闇の渦は自分で出した経験が無い。やり方もわからないから出来るはずが無い。

「そ、それが今はもう出来ないんだ！」

「ん？ 組織を抜けたから？」

「そ、そう」

レグオズはとっさに嘘をついた。でもそれは本当かもしれない。組織を抜けたことで組織専用の技が使えなくなる。それは十分に考えられることだ。

「まあいいや。着いてきて、宇宙列車に向かうからさ」

レグオズはコクリと頷いた。

そしてレグオズはサラの少し後ろを歩き、宇宙列車のある北方面へと向かっていった。

暫く無言のまま歩いていると、サラが横目でレグオズを見ながら話を切り出した。

「ねえ、君名前なんていうんだっけ……」

「レグオズ……。でも、本名は知らないんだ」

「？ どういうこと？」

サラは一旦その場で立ち止まり、レグオズに体を向けた。

「俺には……過去の記憶が無いんだ。あるのは1ヶ月前、デネブラ“鏡”に入った時からのことだけ」

「全く何も覚えてないってワケ？」

「最近になって……ちょっとだけ思い出し始めた。頭に嫌なイメージとか、知らないはず単語が出てきたりしてる……」

するとサラは顎に手を当て、目を右下に下げると少し何かを考え込むように俯いた。

（もしかすると……）

「ねえ君。その嫌なイメージについて詳しく教えて。それと、その単語も」

サラは顔を上げると、そう言った。

サラは何かが引かかっていた。その、「もしかすると」という言葉を決定付けるには本人に確認するしかない。

「わ、分かった。――」

レグオズは、誰かが親であろう人に刃向かっていたということと、フイングという単語が出てきたということをサラに全て話した。

（こりゃ、大変なことになってきたあ……）

「フイングって何か知ってるのか？」

「……知ってる。全てはゴールドシルンに行けば分かるわ」

サラの脳内で全ての点と点が繋がった。そして理解した。レグオズの正体も……

「でも……。やっぱいいわ。タイラントにはわたし一人で行く。君はもう帰っていいよ」

サラの突然の心変わりにレグオズは驚きを隠せなかった。

「何でだよ！？」

「気が変わったの……。じゃあね」

そう言うサラはレグオズに背を向け、猛烈なスピードでその場から去っていった。

レグオズは引きとめようと手を伸ばしたが、そのスピードには触れることすら出来なかった。

（一旦、戻らないと……。まさかあの子が……）

サラは猛烈なスピードのまま、遙か彼方に消え去っていった。

「行っちゃったな。でもアイツ、俺のこと知ってるんじゃないのか？ 表情も変わってたしな……」

（なあガロン、お前もそろそろ教えてくれたらいいんじゃないのか？）

「――」

「ん？ まただ……。また俺が心を閉ざしてるのか？」

「――ろ……」

(え?)

『逃げる、レグオズ!』

「!」

ガロンの苦しそうな叫び声を聞いて、レグオズは心を驚かせた。そして、ふと何か威圧感を感じ後ろを振り向くと――

「ティーゴスト……と、誰だ?」

「ここにいましたか、レグオズ」

「俺と話すのは初めてだな、元組織員……。俺は第5の組織員ニゲゲクだ」

「何だよ、俺はもう“鏡”^{テネブラ}は抜けたんだ!」

「そんなこと知ってますよ。今日は少し話がありまして……」

ティーゴストは何やら神妙な顔つきに変わって、

「死んでください、レグオズ」

そう言い放った。

レグオズはとっさに危機感を感じ、後ろに下がった。

「指令が出たんだ……裏切り者は排除せよってなあ!」

エゲゲクは驚異的なスピードでレグオズの前まで移動すると、握った拳でレグオズの顔を殴った。

レグオズは突然の出来事に動くことが出来ずに、なす術なくその場に倒れこんだ。

「つつ……」

レグオズは殴られた右頬を押さえながら、ゆっくりと立ち上がった。

「くそっ! 煌めけ、光の魂を……。――え?」

武器が出ない。

という以前に、光の一筋さえ現れない。

「ふふふ。無駄ですよ……。あなたの武器は封印されています」

「!? 封印? だからガロンの反応が鈍かったのか……」

元々レグオズの武器はガロンが核となって出来ている。武器が封

印されているということはガロン自体も封印されているということ
と同意なのだ。

「では、無残に殺してあげますよ。——進む針に戻る針、我に時
の魂を……」

ティーゴストのかざした両手が紫色に輝きだす。

「俺も行くぜ。——沈め、そして堕ちろ、我に影の魂を……」

もう一度レグオズと間合いを取ったニグゲクは、右腕を前に突き
出しそう呟いた。するとその右手に、灰色の薄い光が纏わり付く。

そして、ティーゴストの手には鏡、ニグゲクの手には大鎌がそれ
ぞれ現れた。

「まずは俺からだあ！ シャドウ・シックル……！」

ニグゲクは灰色で見るものを恐怖させるような大鎌を頭上で振り
回し、体の前で一閃。振り切った。

鎌からは黒い斬撃が飛び出し、レグオズを襲う。

「……！」

レグイズは何とか横っ飛びでかわしたが、そのかわした先にはす
でニグゲクが死神のような表情で待ち構えていた。

「死ね」

ニグゲクはその場に座り込んでいるレグオズに鎌を振り下ろした。

「……！！」

鎌は何かもう一度横っ飛びで逃げたレグオズの左肩を切り刻ん
だ。

「……」

レグオズは痛む左肩を抑えながら、その場にしゃがみこみ、ニグ
ゲクに体を向けた。

レグオズの顔は汗でまみれ、その汗からはレグオズの焦りが確認
できる。

「相手は……ニグゲクだけじゃありませんよ」

「……！」

レグオズが後ろに体を向けると、そこには両手で鏡を体の前に持

ったティーゴストの姿。

レグオズは間合いを取るために後ろへ下がったが、またその後ろにはニグゲクが待ち構えていた。

（くそつ。挟み撃ちになった……）

「ジェネラル・ミラー！」

そう唱えたティーゴストの鏡から紫色の不気味な光がレグオズに放たれた。レグオズはまた横っ飛びでかわそうとしたが、左肩の傷が思ったよりも深く、痛みでその場から動けず光に直撃してしまった。

「！」

だがレグオズの体には傷など何も出来ず、何も変化は無かった。

（不発？）

そう思ったレグオズは今のうちと、この場から回避しようとしたが、動かない。髪の毛一本さえ動かない。声も出ない。

レグオズは完全にまるで石のように固まってしまった。

（……な、何だよコレ……）

「へっ、ジ・エンドだ」

ニグゲクが思い切り鎌を振り上げる。

そして――

非情にもレグオズに鎌が振り下ろされた。

鎌はレグオズの左首部分から腰まで斬り下ろされた。

そして、その時ようやくレグオズの体が動くようになった。

「ぐはっあ！」

レグオズは動くようになったと同時に体に、耐え切れない激痛が襲った。

「うわああああああ！！！！！！」

あまりの痛さに絶叫し、その場へ倒れこんだ。

レグオズの体は左半身のさらに半分が腰まで切られている状態。

左腕は胴体から切り離され、無残にもそれは地面に落ちている。

レグオズの額から信じられないほどの汗、口からは大量の血、斬

られた部分からも真っ赤な血が溢れ出ている。

「はあはあ……うつ、くつ、ぐはっ……くっそ……」

レグオズの言葉はもう言葉でなくなっている。

そんな無残な姿になったレグオズをティーゴストとニゲゲクの二人は、哀れみの目で見つめている。

—— 一方その頃サラは、宇宙列車の乗り場をあっという間に通り過ぎ、この世界の外れにまで来ていた。

「ふう」

サラは急停止し、額の汗を服でぬぐった。

「はっ！」

サラは空間に右手を突き出すと、徐々に空間が歪み、何やら大きな建物が現れた。

サラはその廃墟のような建物の扉を開けると、中に入っていた。
「あっ、お帰りアイム！」

緑色のシヨートの髪で、サラと同じくらいの年の少女が、高いところから飛び降り、サラに歩み寄ってきた。

「今はサラって言うてよ、ベリト。ところでガミジンはいる？」

「んー、さっき出てったよ。何か新しい仲間、って言うてたかなー」

「新しい仲間なんて久しぶり……。面白い奴だったらいけど。他の皆は？」

「シトリーは2階で寝てて、マルコは暇つぶしてどこかに行っちゃた。シャックスは晩御飯の買出しに行ってて、カймはワアプラと3階でゲームしてるー」

「そう、じゃあガミジンが戻ってくるまで待つわ……」

サラは疲れきった体をほぐしながら、少し古くなったソファに腰をかけた。

緑髪の少女ベリトは楽しそうにスキップしながら2階への階段を上っていった。

「はあ、あとちょっと……あとちょっとで……」
サラは、そうため息を漏らした。

この廃墟は未知の場所。誰にも知られることの無い、ある組織の
アジト。

第1章 第2話：強襲の追っ手（後書き）

さあ、個人的にはここらへんの話が今後の重要な鍵になってくると思います！

次回予告

ついに解き放たれる心の力

覚醒したレグオズの前に現れたのは……

第1章 第3話：ガロン

悶え苦しむレグオズの意識は徐々に薄れ始めた。

目がかすんで行き、声も声でなくなってくる。息づかいが荒くなり、痛みも絶頂に達していた。

レグオズはもう何がなんだか分からなかった。裂かれた左半身の半分の部分に顔を向ける余裕すらない。

「それでも元・^{テネブラ}鏡”ですか……。まあ、武器を封印してるから。というのもあるんでしょうけどね」
ティーゴストの頭に、レグオズがグノウに敗れた時の事を思い出す。

ニグゲクと共にレグオズの剣を研究室に持ち帰ったティーゴストはすぐさま何やら用意を始めていた。

「何を調べるんだ？」

ニグゲクのその問いに、作業をしながらティーゴストが答える。

「この武器の底を知りたいのですよ。始めてレグオズと会った時、彼の中に何か怖いものを感じました。彼の中に誰かがいるような感覚をね……」

「つまり……やつには別の力が眠ってるって言うのか」

「ええ」

そしてティーゴストが研究の準備を整えた。

研究室の一部には黄色い液体の入った巨大な水槽と、紫色の鎖が無造作に置かれていた。

「封印するの！？」

「はい。封印したらレグオズは武器を出せないでしょう。そうすれば彼が覚醒して何かが出てくるんじゃないでしょうか」

「！！！！！！！！」

「！」

「！」

レグオズの声ではない、完全なる化け物の声が大地に響き渡る。
ティーゴストとニグゲクもその声に心を驚かし、恐怖した。

そして、レグオズではない何かは徐々に何かを形作っていく。

白い、所々にヒビが入った骨の両腕、両脚、黒い布を腰に巻いた
骸骨がその姿をあらわにした。

その骸骨は腰以外に上半身に黒い布をマントのように纏い、右腕
には白い刀身の鋭い刀が握られている。

「フウウウウウ……………」

その骸骨は静かに息を漏らした。

「何者だ、なにもんテメエ」

「あなたがレグオズに潜む化け物ですか」

「貴様ら、レグオズの体を傷つけた代償大きいぞ。武器を封印した
ことよりもな……………」

骸骨は重い口を始めて開いた。

その声は、聞く者を恐怖に陥れるような、そんな声だ。

「名は何と言うのですか？」

「俺は…………ガロン。レグオズの力の核であり、最強種の守護獣だ！」
ガーディアン

この骸骨の正体はレグオズの心の力であったガロン。

危機的状況に陥ったレグオズを押しつけてこの世界に出てきたの
だ。

「！ どう……………いう……………事ですか……………」

「貴様らが知る意味は無い！」

ガロンは脅威のスピードでティーゴストに近づくと、その剣を素
早く振った。

「くっ」

その斬撃は何とか鏡で防いだが、すぐに第二撃が襲い掛かる。
上から振り下ろされた剣は正確にティーゴストの体を斬りつけた。

「うつ！」

ティーゴストは鏡を落とし、その場にひざまずいた。

そこへ、鎌を右手で持ったニグゲクが跳び上がり、ガロンに鎌を振り下ろす。

キンッ！

ガロンの剣とニグゲクの鎌が交錯する。

2人はその後何度も斬りあい、互角の勝負を演じている。

「シャドウ・シックル！」

黒い斬撃がガロンに向かって襲い掛かる。

ガロンは高く跳び上がりそれを軽々とかわすと、すぐさま急降下し、ニグゲクに斬りかかる。

ニグゲクも軽い身のこなしでかわすと、ガロンの首目掛けて鎌を横に振るった。

ガロンはその場にしゃがみこみかわしたが、そこにニグゲクの足が振りかかった。

ガロンはその体制から避けることが出来ずに、吹き飛ばされてしまった。

だが、空中で数回回転し、見事に着地した。

「ふっ……」

「……」

互いに相手を睨み付け合う。

次、先に動いたのはまたもやガロンだった。

ガロンは剣を相手に突きつけるように持つと、その状態のまま突進して行った。ニグゲクは鎌を体をの前に構えその攻撃に備える。

そして剣と鎌とが再び交錯する直前で、ガロンが高く飛び上がる。

「！ フェイクか」

ニグゲクは上空のガロンに目を向ける。

スケルトン
「白骨斬」

ガロンは空中からニゲゲクのいる地上に向けて何度も剣を振った。すると剣からは、巨大な白い塊となった斬撃が出現し、ニゲゲクに襲い掛かる。

ニゲゲクは力をもう一度右手で持つと、その巨大な斬撃に向けてシャドウ・シックルを放った。

黒い斬撃は白い斬撃に直撃した。
すると……

「！　な……」

黒い斬撃は細かな塵に分解され、風に紛れて消えていった。
白い斬撃は驚くニゲゲクにそのまま襲い掛かる。

「くそっ」

ニゲゲクは鎌を体の前に構えたまま、斬撃を受けた。
白い斬撃は鎌に直撃した。

斬撃の触れた鎌は、さっきの斬撃と同じように塵と化していく。

「な……」

ニゲゲクはすぐさま鎌を手放し、空高くジャンプし、その場を回避した。

すでに鎌は全てが塵と化して、その姿を見ることが出来なくなっ
た。

「咄嗟に武器を捨てたか……いい判断だ。だが、甘い。そんな無防
備な状態で跳びあがるとは無謀な……」

ガロンの言うとおりだ。無防備な状態で空中にいてもただ身動き
が取れないだけ。

ニゲゲクはあまりの衝撃で判断力が鈍っていたのだ。
そんなニゲゲクの元にガロンが跳び上がる。

そして……

ドシュー！！

ガロンの剣がニゲゲクの体を切り裂くように斬りつけた。

ニゲゲクは血を噴出し、地面へと落下した。

ガロンもゆっくりと地上に降り立つ。

ニグゲクは落下の衝撃で何本か骨も折り、意識を失いかけていた。
「こいつはもう駄目だな。……その鏡のお前」
「くっ……何ですか」

ニグゲクよりは全然軽症なティーゴストにガロンが歩み寄っている。

「お前は私とレグオズを引き合わせた張本人だ。あのトレーニングの時に……。それは感謝している……が、なぜレグオズの武器を封印した。あの封印は私の力を半減させている」

そう。ニグゲクを圧倒したガロンの力はコレで本来の半分程度なのだ。

「なぜ？ 研究者に理屈など必要ありませんよ。興味本位で研究する。その本能が大事なのですよ……」

ティーゴストは独自の研究論を語り始めた。

だがガロンはそんな事に興味は無く……

「お前を殺せば封印は解けるのか？」

「残念ですね。私を殺そうがどうしようがあの封印は解けません」

「……」

さすがのガロンもその事実には驚いたようだ。

「あれは一種の暗黒魔法でして……封印を解くには、空間回帰を使えるものでないといけませんね」

「空間回帰……アイツか」

ガロンはその高等魔法を使う者を知っているようだ。

「心当たりがあるなら行ってみてはどうです？」

「いや……そろそろ時間だ」

そういうとガロンの体が、始めのように煙、泡となっていく。そしてそのまま消滅していき、レグオズの姿へと戻った。

レグオズは傷が完全に回復し、腕もいつの間にか付いている。

だが意識は無いようで、その場に倒れこんだ。

「あの骸骨……自らのことを守護獣だといった。興味がありますね。レグオズ、研究対象になってもらいますよ」

ティーゴストの研究への本能がまたここで目覚めた。

レグオズの秘密を暴こうという気持ちで胸がいつぱいなのだ。

ティーゴストは闇の渦を出すと、レグオズを抱えた。

もうニグゲクのことは眼中にないようだ。

「悪いが、そいつは俺が回収させてもらう」

そこへ、黒髪の男がティーゴストに立ち塞がった。

「なんです、アナタは？ 次から次へと……」

「そいつは俺の……同類。だから俺はそいつを連れ帰る義務がある」

「人気者ですねレグオズは。だが渡しませんよ。刃向かうのなら殺しますよ？」

「……お前、死ぬか？」

黒髪の男はティーゴストの顔ギリギリに手を向ける。

ティーゴストはその手を振り払おうと手を上げた。……その時。

「滅却破^{カノン}」

「！！！！！！」

光り輝くレーザーが男の手から放たれ、ティーゴストの頭を吹き飛ばした。

頭を失ったティーゴストは血を噴出し、その場へロウソクのように溶けていった。

「鏡^{テネブラ}」は死ぬとこうなるのか。ワアプラに教えてやるか……」

男はレグオズを抱えると、瞬間移動でもするかのようにその場から消え去った。

そこへ一人残されたニグゲクは何とか意識を取り戻しており、この出来事を全て見ていた。

「そ、そんなバカな事があって……。ティーゴスト、殺^やられやがった！！」

ニグゲクが無残にも消滅したティーゴストの姿を見て、心を大きく惑わしていた。

「こんなの、グノウが黙っちゃいねえぞ。組織員がこうして死ぬな

んで、グノウにとつたら屈辱そのものでしかないんだからよ……」

ニゲゲクは自分の怪我を忘れるほどに動揺していた。

このことはグノウに知らせるべきなのか、どうなのか。

いづればれる事だが、知らせればグノウは怒り、あの男を殺しに行くだろう。

自分の名誉のために――

ニゲゲクは小さく拳を握りながら立ち上がった。

そして、闇の渦を出し、その中へと消えていった。

第1章 第3話：ガロン（後書き）

ティーゴスト……殺しちゃいました。

アンケートでティーゴストファンが一人いたのでその人には申し訳ないことをした。と思っています。

でもティーゴストは非常にに重要人物ですから、これからの話に大きく関わってくると思います。

第1章 第4話：新たなる猛者たち

レグオズを連れ去った男は、数秒もしないうちにある廃墟へとたどり着いていた。

その廃墟はさつきサラが訪れたところと同じだ。

「誰か帰ってきてるのか……」

この廃墟は普段、周りから見えないように結界が張ってある。だが今はその結界は無く、誰でも入ってしまう状態になっている。

男は何かあったのかと危機感を募らせると、レグオズを抱えたまま、足早に廃墟へと入っていく。

男は慎重に廃墟の中へと入り、柱の影から中を覗いた。すると、

「あ！ ガミジンだ！」

2階から緑色の髪の少女・ベリトが声を張り上げた。

「！ ベリトか」

その声で、ようやくガミジンの存在に気づいたサラはソファから立ち上がった。

「やっと帰ってきた……。ところで、なんで隠れてるの？」

「はあ」

男は、何も無かったことに心を落ち着かせ、一息吐いた。

「サラ、ちゃんと結界は張っておけ」

「しょうがないよ、すぐに出て行く予定だったんだから」

理由は謎だが、この廃墟はこの者たちにとって誰かにばれてはいけないらしい。

「そうか……まあ、いい」

と、柱に隠れていた男・ガミジンは柱から離れた。

「！ その子……なんで！」

サラは目を丸くしてレグオズの姿を見つめる。

「知ってるのか」

「知ってるも何も、あたしはその子のこととどこに来たんだから」
ガミジンはその場から歩き出し、ソファにレグオズを寝かせると、
自分も別のソファに足を組んで座った。

「ベリト、全員呼んで来い。大切な話がある」

「OK！ 了解い！」

と言うと、ベリトは上の階へと翔ける様に上っていった。

「ガミジン。その子、元“鏡”だよ？」
デネフラ

「知ってる。だが重要なんだ。こいつの存在がな」

「どういう……？」

「全員そろってから話す」

と、ガミジンは目を閉じた。

サラはソファに横になるレグオズを見つめ、一つため息を吐いた。

「帰ったぞ」

と、一人の赤髪の男が中に入ってきた。

「あつ、ガミジン、アーム！」

男は手にレジ袋のようなものを大量に持っていた。その袋には野菜から肉まで、様々な料理が入っている。

「シャックスか」

「今は、サラって呼んでよ」

「お、おお。ところで辛気臭い顔だな……。何かあったのか？」

その時、シャックスはレグオズの存在に気がついた。

「なるほどな……」

レグオズを見ただけで今の状況を理解したシャックスは、このフロアの端にある台所のようなところまで歩き、手に持っていた袋をすべてそこに置いた。

「みんな呼んできたよ！」

ベリトは階段を降りずに、2階からそう叫びながら勢いよくジャンプし、飛び降りた。

「あー眠むい。何だよ話って」

目をこすりながら、天然パーマであろう金髪の男が目をこすりながら階段を降りてくる。

「ったくもうちょっとで勝ったのに……」

「残念やったな、お預けや」

と、今までゲームをしていた2人も階段を降りてくる。

悔しがっていた方の男は青色の髪、独特な話し方の男は逆立てた銀髪をしている。

「後は……マルコシアスだけか……」

ガミジンはメンバーを全員確認すると、ソファから立ち上がった。

「みんな、集まってくれ」

ガミジンは大きな声で皆を呼び寄せた。

すると全員がガミジンのいるソファ付近に集まり始めた。

するとその時、

「物騒だな。結界張つといたぜ」

と、茶髪オールバック気味の鋭い目の男がこの場に帰ってきた。

「マルコだ!」

ベリトがそう叫んで、その男・マルコを指差した。

「これで全員だな」

ガミジンは一息をはくと、もう一度ソファに座った。

「みんな、もう一度言う。今から話すのは、大事な話だ」

ガミジンの一つの言葉で場が静まり返る。

「率直に言おう。そこに寝てる少年、今日から俺たちの仲間だ」

『――』

その場にいるメンバー全員が心を驚かし、目を丸くした。

「さつきベリトが言ってた新しい仲間ってこの子のこと!？」

と、サラが思わず叫ぶ。

「そうだ」

「……何か、見たのか？」

マルコがそう言う。

「ああ。実を言うと、コイツの存在は前から知ってた。コイツの中には俺たちと同様、心の存在があるって事もな。……それにさつき、もう出てきていた」

心の存在とは、レグオズで言うガロンのことだ。

『!』

また、みんな目を丸くする。

「コッチの世界に出てきたって事か？」

関西弁の男・ワアプラがそう言う。

それに対しガミジンは1回頷いた。

「で、どんなやつだった？」

と、シャックスが問う。

「上級の守護獣・ガロンだ」

『!』

またまた皆が心を驚かせる。

「ガロン……行方不明になってた……。それも……最強種……」

驚きの連続ですっかり目が覚めたシトリーが目を大きく開いた。

「この少年何者なんだ」

マルコがレグオズの姿を見つめる。

「元“鏡”^{デネプラ}。で、多分ゴールドシルンの出身者」

と、サラが自ら知った情報を口にする。

「“鏡”……それにゴールドシルンの……。身分は？」

ワアプラがそう問うと、ガミジンが静かに口を開いた。

「王族だ」

『！！！！』

今日最大の衝撃の驚きがメンバーを襲った。

王族。それは、その国を治める王の血族。

ガミジンはレグオズがその王の血族だというのだ。

だがそれを簡単に信じるやつは、どこにもいないだろう。

「ちょっと待ち。おかしいで。なんで王族が“鏡”^{デネブラ}に入っとんねん」
ワアプラの疑問は最もだ。

が、ガミジンはその問いにもすぐさま答えた。

「記憶を失っている。そして彷徨っている所を“鏡”に拾われた」

「記憶喪失……ってことお？」

ベリトが難しい話に頭を悩ませながらも、何とか付いていっている。

「……ごめん、あたしそろそろ行ってくる」

と、サラがソファを立ち上がる。

「そうか、そういえば潜入操作中だったな」

マルコがそう言う。

「うん。めんどくさいけど面白いからいいけどね。でもこの子とシルン＝フォードが繋がってるとしたら……。さらに深く捜査する必要があるみたいね」

と、サラが分析した。

それに対しメンバー全員が無言で答えた。答えはもちろんYESだ。全員がその頭を下に1回頷かせた。

——そしてサラは建物の外へと出た。

「結界完了！ よし、急ぐか」

と、サラが後ろを振り向いた。

その時……

「！」

何かがサラを襲った。

サラは何とか体を側転させてかわしたが、顔に傷を負っている。その傷から見て襲ったのは刀か、刃のあるものだろう。

「ったく、なんで俺が行かなきゃいけないんだよ」

耳をかきながら、現れたのは……

「君、あのときの！」

サラの目に映ったのは……

“鏡”第7の組織員、ベゴンだ。

「事情が変わった。レグオズ、返してもらっぜ」

第1章 第4話：新たなる猛者たち（後書き）

やっとこの展開に入れました。

多分序盤の話で一番盛り上がってくると思います。（個人的にですが……）

僕の予想としては、ガミジンファンが増えると思います！
イラストを載せるのでまた見てくださいね！

第1章 第4話：モード転換、デビルモード

「事情が変わった。レグオズ、返してもらうぜ」

そう言ったベゴンの表情は真剣そのものだった。

「知らないよ、そんなやつは」

と、サラは知らないフリをした。

が……

「嘘ついても無駄だ。その結界の内側に隠してるんだろ？」

ペステイア
“獣”」

そのベゴンの言葉にサラは目を丸くした。

「！　なんで知ってるの……」

「調査済みだ。俺らのことをかぎまわってるのもな。前に会った時から全ては分かっていた」

ベゴンはグレミオへの任務の際に出会ったサラのことを知らない振りをしてただけで、実は何かも全て知っていたのだ。

「鏡^{テネブラ}」。どうして礎を破壊するの。宇宙のバランスが崩れてあなたたちへの被害も大きいはず……」

「はあ。敵にそんな事、べらべら喋ると思うか？」

「……」

痛いところをつくベゴンにサラはただ黙って、ベゴンを見つめている。

「ま、はつきり言っんでもいいんだけどね、君達なんて……」

「？」

「あたしたちの目的はあくまでゴールドシルンと大監獄レクルゾーリオにあるの」

大監獄レクルゾーリオというのは、タイラントの次に大きいとされる、世界全てが監獄になっている世界のことだ。そこには大量の犯罪者が収容され、釈放と言う事例は過去に一度も無い。ここは、宇宙全体を警備している、宇宙刑務組織“臨”だ。

「大監獄……。あそこは地獄だぞ？　何の用があるんだ？」

「敵にそんな事、べらべら喋ると思う?」

サラはベゴンのお株を奪うように、さっきと全く同じセリフをそっくりそのまま返した。

それに対してベゴンは目の鋭さを増し、サラを睨みつけた。

「悪いけど、ここから先には進ませないよ。あたしが君をとっ捕まえて……終わり!!!」

と、サラはその場から瞬間移動しベゴンの正面に現れ、頬を殴りつけた。

瞬時にバク転でかわしたベゴンは間合いを取るためにそのまま何mか後ろに下がった。

「時間がねえんだ。本気で片付けるぞ! —— 舞い踊り飛沫しぶきをあげろ、我に水の魂を……」

ガロンが両拳を握ってそう言霊を言うと、その両拳に水のような光が纏わり付いた。その光は姿を変えて、6本のナイフに変化した。そのナイフは両手の指の間にそれぞれ3本ずつ挟まれ、ナイフ自身は特長的な形をした水色のナイフだ。

「さっきのはそれが……」

と、サラは頬に付いた傷に手を当てる。

そしてサラもその武器の特徴を見て後ろに下がる。

（形状から見て近距離でも遠距離でもいけるタイプね……。厳しいな、苦手なタイプだ）

サラはそう考えると、ポリポリと頭を掻いた。

「行くぜ」

ベゴンはまず、右手のナイフを3本とも投げつける。

ナイフは強烈な速さでサラに向かって突き進んでいく。

サラは高くジャンプしてそのナイフを全てかわした。

が、ベゴンは残りの左手のナイフを全て空中のサラに投げた。空中で身動きが出来ないところを狙ったのだ。

だがサラもそう簡単にやられるわけはなく、空中で体をねじって全てのナイフをかわした。

そしてそのまま急降下し、ベゴンに拳をつきおろす。

「！」

激しい砂煙が舞い上がる。

「感触が……」

サラにはベゴンを殴った感触が無かった。というよりは、何か別のものを殴ったという感じがした。

サラは地面に降り立つと、自分の拳を見つめる。

その拳には、水が付着していた。

「水？」

すると……その水は徐々に拡大していき、サラの周囲に広がり、纏わり付いていく。

「くっ」

サラは水を殴るが、何の効果も無い。そもそも水には打撃は効かないのだ。

そして水は鋭いベゴンのナイフに変化した。そして、サラの体を切り刻んでいく。

「痛っ！」

サラはジャンプしてかわそうとするが、そんな隙はなく、その場で身構えるしか出来なかった。

「このままじゃ……死んじゃうじゃん。——モード転換！ デビルモード！」

サラの体から大量の気、オーラが噴き出す。サラの髪の毛は上昇するオーラと共に少しだけ逆立っている。

「ダア！！！！！」

サラが両拳に力を入れると、周囲のオーラと共に水が遠くにはじけ飛ぶ。

そして徐々にサラが姿を変え始める。

サラの体は大きな獣に変化し、胴体からは2つの頭が生えた。そ

れはまるで三ツ首の番犬ケルベロスのような。だが、サラの場合は犬ではなかった。中央の顔は額に星印が入っている。

見た目は……猫だ。

世にも珍しい三つ首の猫だ。

そして手には、炎の灯った三叉の矛が握られている。

「フシユウウウウ……」

サラ？は静かに唸り声を上げて、周りを見渡している。

「痛えな……」

その時、吹き飛ばされた水が一箇所に集合し、ベゴンへと姿を変えた。

ベゴンはわずかに体に傷を追っているのが分かる。

「猫か？ いや……ケルベロス？ でも顔は猫……だよな」

ベゴンは顎に手を当てて考え込む。

「フシユウウ。燃やし尽くしてやるニヤ」

真ん中の首がそう話す。

「ニヤ？ やっぱ猫だな……。ってより、お前は別の生物なのか？ それともさっきの……サラだっけか？ どっちなんだ？」

「サラの心の中の存在だニヤ。我が名はハボリユム」

「へえ」

と、ベゴンは興味深そうな顔でハボリユムを見つめている。

——その頃、廃墟の中では……

「なんや、外が騒がしいな」

カイクとTVゲームをしていたワアプラが3階から外の方角を見つめる。

「この感じ……アイムか。何かあったのか」

カイクが神妙な顔つきになっていく。

すると、

「“鏡”と戦っている」

階段をガミジンが上ってくる。

「“鏡”！？ 手助けしないでいいのか？」

カイルがコントローラーから思わず手を離してしまう。

「今ここの結界を解いたら敵は間違いなく、結界の術式を解析するだろう。そうなれば危険だ。それに…… アイムはもうあの状態だ。生け捕りにしてくるだろうな」

ガミジンの言葉に納得したカイルとワアプラは何度か頷いた。

「でも…… 相手は相当なやり手だ。簡単にはいかないはずだ」

ガミジンがそういうと、1回TVの画面を見て下へと降りていく。

「……！ あっ！ てめえ、いつの間に！」

カイルがゲームの場面に顔を向けたら、すでにカイルの操作するキャラはワアプラのキャラにやられていた。

カイルが話してる内に、ワアプラは倒していたのだ。

「奢り決定やで、カイル」

「くそっ」

ふてくされたカイルは足を組み、その場に強く座り込んだ。

——そして、外では……

「はぁ、はぁ……。なんて強さだ、この猫野郎」

ベゴンの体は火傷のような跡がたくさんついている。他にも引っ掻かれた様な傷も付いている。

逆にサラの心の存在・ハボリウムにはいつさいの傷が付いていない。

「いくら水でも我的炎を消すことは出来にゃいニヤ」

中央の顔がそう言う。どうやら、左右の顔は話さないようで、ただの飾りのようだ。

「それじゃ、止めニヤ」

ハボリウムは鋭い切っ先の三叉の矛を持ち上げる。

だが、危機を察知したベゴンは闇の渦を出現させると、急いでその中へと消えて言った。

「ニャ……」

少し、落ち込んだような表情になったハボリウムは体から赤いオリを噴出して、サラの姿に戻った。

「ふわあああゝ。疲れた……。あいつ、強いな。猫ちゃんでも一撃しとめられないなんて……」

サラのいう猫ちゃんとは、ハボリウムのことだ。
その言動から、ハボリウムの強さが理解できる。

—— “鏡” のアジトに戻ったベゴンは痛む傷口を押さえながら、ある一室に入っていく。

「戻ったか、ベゴン」

その部屋にはどうどうと足を組んで椅子に座ったグノウがいた。

「……」

ベゴンは無言のまま部屋をドアを閉めた。

「何か成果はあったか……？」

「はい……。どうやら“^{ベスティア}獣”の目的は、ゴールドシルンと大監獄レクルゾーリオにあるようです」

「なるほど……。やはり復讐か……。——ベゴン、下がっていいぞ。しばらくはその傷を癒すことだな」

グノウはニヤリと笑うと、少し間を空けてベゴンにそう言った。

ベゴンは無言のまま、部屋を出て行く。

部屋を出たベゴンは傷を抑えながら、自室に戻っていった。

「くそっ！」

どこかイライラしているベゴンは、ベッドに思い切り拳をたたき

つけた。

「あんな、猫に負けるのか……。俺もまだまだだな」
ベゴンの瞳には、少し悔しさがにじみ出ている。

「もっと強くなってやる。例の計画のためにもな……」

第1章 第5話：神の子

ベゴンを“鏡”アジトへと追い返したサラはそのまま、ゴールドシルンに向かって爆走していった。

一方、廃墟の中では――

「終わったみたいだな……」

ソファに足を組みながら腰掛けているガミジンが外の方角に顔を向ける。

「デビルモードだったんなら勝って当然だろ。所詮、相手は“鏡”
こときの下等集団。恐れるべきは“白”^{エンジェル}、“黒”^{デーモン}、“臨”^{りん}くらいだ
ろ」

調理場で、華麗な包丁履きを見せているシャックスがそう言う。

“白”^{エンジェル}、“黒”^{デーモン} この2つの組織については謎が深まるばかりだ。

するとその時、いまだソファに寝そべったままだったレグオズが静かに目を開けた。

「ん……」

結界のためこの廃墟には光が差し込まないが、久しぶりに目を開けたレグオズにとっては電球の輝きさえも太陽のようにまぶしく感じていた。

「起きたか」

レグオズは、目をこすりながら体を起こしソファに座り込む。

「お前……誰だ？」

「俺の名はガミジン。^{ベスティア}“獣”のリーダーだ」

「^{ベスティア}“獣”？」

「……レグオズと言ったな。お前は俺たちと同類の存在だ。これからは俺たちと共に行動してもらおうぞ」

突然そんな事いわれても……。とレグオズは目を丸くした。

「覚えているか。お前が、あの後どうなったか……」

「あの後？」

「左腕を失ってからだ」

「……！」

その時、あの戦いの一部始終を全てを思い出したレグオズは咄嗟に自分の左半身を見つめた。そこには落とされたはずの左半身がきちんとついていた。

「なんで……」

「説明するのだリーだろ。アレで一気に全て教えてやれよ」

マルコが2階の階段から、ゆっくり降りてきた。

「いや……俺の口から言おう」

ガミジンは、何か特別な力を使えというマルコに反対し、自分の口から真実を伝えようとした。

「しっかり聞いてくれ。お前の所属していた“鏡”。知つての通り礎を破壊して回っている悪徳集団だ。だが最近はその行動が活発でなくなった。その理由の一つ。お前が加入したからだ。さらにその理由は、不明だが……。はっきり言って“鏡”なんてのは勝手に野放しにしてもいい連中なんだ。個々の能力で魅力あるやつはいるけど……。総合的にはどうでもいい存在なんだ。で、俺たちがお前と同類だっていうわけだが、それは簡単だ。『心の中に別の存在が眠っている』という事だけだ。そしてお前には俺たちと一緒に、ある目的に付き合っしてほしい」

「ちょっと待てよ。意味が分からない。“鏡”がどうでもいい存在？ そんなわけ無いだろ？ 前に知り合ったやつも俺たちの情報をほしがってたし、警戒してた……」

レグオズが言うのはサラの事だ。

「恐らくそいつも俺の仲間だな。サラってやつだろう」

「……！」

凶星だった。

「……目的って何なんだ？」

「復讐」

レグオズはたったの単語に奥深さを感じていた。ガミジンの表情は真剣そのもの。冗談を言っているはずが無い。とレグオズは確信した。

「誰にだ？」

「臨」。宇宙全体を警備している宇宙刑務組織の事だ。あいつらは俺たちの忌まわしき記憶を勝手に消し、俺たちを“臨”に加入させた」

そというガミジンに続いて、ゲームを中断して降りてきたカイムが話を続けた。

「忌まわしき過去。ゴールドシルンのあの惨劇、悲劇。子供が俺たちの家族を、大事な人を惨殺した。でも、その子供も“臨”に操られていたんだ」

その過去を思い出し、カイムは少し顔をうつむけた。

すると今度は、同じくカイムと共に降りてきたワアプラが話を始めた。

「その子供は操られるだけ操られて、道に捨てられた。それも……自分の親にな。本気でやってるって勘違いされて……な。親を失ったボクたちはその後“臨”に連れて行かれて、記憶を剥ぎ取られたんや、綺麗さっぱりにな……」

「でも！ 記憶……取り戻したんだろ！？ じゃあいいじゃないのか？ 俺の記憶は、戻ってないんだ……」

「記憶を失った場合にはあるキーワードでその記憶を取り戻せる。そして……お前のキーワードは……」

ガミジンはキーワードを言おうとしたその時、

ドオオオオオンと、激しい音を立てて巨大な何かが上空から結果を突き抜けて落ちてきた。

メンバーは全員、瞬時に反応してその場から離れた。ガミジンはレグオズを抱えて、遠くへ下がった。

「なんやねん、コイツ」

ワアプラが歯を食いしばる。

「でか……」

ベリトはその何かのあまりにも大きさにその言葉を漏らした。

「はっ」

マルコは啞然としてただ、鼻で笑っている。

「眠気……覚めちまった」

いつも寝てばかりのシトリーは大きく目を開けてその何かを見上げている。

「おいおい、冗談じゃねえぞ」

シャックスはさっきの衝撃で散らばった食材を集めながらそう言った。

「これ……エグイな」

普段ゲームの世界に入り込んでいるカイクにもその何かを見ただけで、恐怖を超えたドキドキ感が襲った。

「何だよ、こいつ」

レグオズもただそれを見つめている。

「ついに来たか。“臨”！」

ガミジンを含め、メンバー全員が目にしたのは、自分達の500倍はあるつかという大きな体の巨人だ。

顔は遠すぎて、確認することが出来ない。

「こいつ“臨”なんか？」

「多分そつだよ。あの実験中だった人造人間、ヴァージョン・ジャイアントだろ？」

「ううう……うおおおおおおおおお!!!!!!!!!!!!!!」

!!!!!!!!!!!!!!」

その巨人は五月蠅すぎる獣のような咆哮を上げた。

メンバー全員がその声に耳を塞ぐ。

「獣共！ ドンの命令！ 潰す！！」

巨人は大きな右手拳を握り、そのまま突き落とすように真下・レグオズたちの所に振り下ろした。

「ヤバイ！ みんなよける！」

マルコがそう叫ぶと、メンバー全員が素早い動きで遠くへと離れた。

幸いレグオズはガミジンと一緒にいたため、一緒に逃げる事が出来たが、もし一人だったらと考えると、レグオズは少し体に鳥肌が立った。

「いきなり研究成果を仕向けてくるとはな……。 “臨” も必死だな」
ガミジンはそういうと、拳をポキポキと鳴らしながら聳え立つ巨人の下へと歩み寄っていく。

「ガミジンがやるのか？ こりゃ勝ったも同然だな」

そのガミジンを見てシャツクスが、表情を和らげた。

「巨人。聞こえてるか？」

「うおおお」

「お前らのボス伝えておけ。一週間後、お前達のアジトに襲い掛かるとな……」

「うおおおお！」

言葉を理解しているのかは分からないが、その巨人はずっと唸りを上げている。

「知能はまだまだ低いようだな」

ガミジンは、この巨人が話を理解していないと悟ると、黒い漆黒の目で巨人を見上げた。

その鋭い目つきは巨人の顔へと向けられている。

「！う……？ うおお……。うお？」

そのガミジンの目を見つめた巨人の様子が徐々におかしくなってくる。

目は焦点が合っておらず、口も呆然と開いている。

「いきなりやな……。アレ」

その巨人の様子を見たワアプラは、ニヤリと口角を上げた。

「うお……」

すると巨人は大きな足を一步前に出した。――が、その足取りは甘く、両脚がほつれてその場に転んでしまった。

その衝撃はすさまじいもので、大陸全土に響き渡るのではないかというくらい衝撃だ。

幸い、メンバーたちには巨人の体で押しつぶされることは無かった。

「言葉が通じないならお前を生かしておく意味は無い……。まあ、どちらにしろこの声は聞こえていないだろうがな……」

ガミジンはそう言うと、ズボンのポケットに手を入れながら、巨人の顔下へと向かっていく。

「なんだ？ 巨人の動きが……」

レグオズは行動がぎこちない巨人に、違和感を感じていた。すると、レグオズの元にシャックスが歩み寄ってくる。

「あれがアイツの力。王をも超える神の力」
「神？」

「そう、アイツの漆黒の瞳を見たものは恐怖の底に突き落とされ、五感を奪われる」

「！ そんなの……。無敵だ……」

「そう。だから、その力を見たものはアイツに異名をつけた……」

——ガミジンは巨人の頭に到着するとポケットから手を出し、巨人の大きな顔に手を向けた。

メガカノン
「大滅却破」

光り輝く巨大なレーザーがガミジンの掌から放たれる。

そのレーザーはティーゴストと戦った時よりも大きなレーザーだ。レーザーは巨人の顔を完全に消失させ、遥か彼方へと消えていった。

「神の子……ってな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1052h/>

礎の心臓

2010年10月15日23時46分発行